

## 第2章

# 山形大学教官研修会 「第2回 教養教育FD合宿セミナー」

平成14年度教養教育改善充実特別事業  
第2回山形大学教養教育FD合宿セミナー  
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」



日時：平成14年10月19日(土)～20日(日)  
場所：山形大学蔵王山寮  
主催：山形大学教育方法等改善委員会

## F D合宿セミナーに当たって

山形大学は6学部を擁する総合大学です。教養教育は、総合大学の特性を有効に活用するために全学出動体制を採っており、それは山形大学の大きな個性にもなっています。学部の垣根を越え、山形大学全体の教育を考える上で、教養教育は全ての教官の共通基盤となるものです。また、生き残りをかけた大学改革に際し、授業の充実が最も重要な課題の一つでしょう。

今回のセミナーの第一の目的は、「個々の教員が、山形大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法などについて、あたらめて主体的に検討し、再構築していただくこと」です。この目的を達成するために、まず、参加者の皆様に御担当いただく新しい授業科目について考えていただきます。そして、そのシラバスをグループで協力して作成していただきます。こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています。

セミナーは、シラバスを作成するための3つのプログラムと、その他の3つのプログラムから構成されています。各プログラムは、グループ作業を中心に組まれており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

また、「教養教育を素材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が山形大学の教養教育を始めとした教育全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「山形大学の構成員こそが山形大学の財産」という精神でのぞんでいます。



## 第2回 山形大学教養教育FD合宿セミナー日程表

### 第1日目 10月19日(土)

時刻	項目	担当	参照ページ
11:50～	山形大学集合・受付（正門付近）		
12:00	送迎バス 大学出発（バス内で自己紹介）		
13:30	会場到着 セミナー開会 委員長あいさつ	司会：小田	
14:00	アイスプレ-キング	元 木	
14:20	オリエンテーション	小 田	P. 4 参照
14:50～16:20	プログラム 「山形大学のニーズと課題」	元 木	P. 7 参照
16:20～16:30	休憩（10分間）		
16:30～18:00	プログラム 「山形大学をどのような大学にするか」	元 木	P. 10参照
18:00	休憩・夕食など		
19:30～21:00	プログラム 「科目設計1：授業名と目標の設定」	佐 藤	P. 12参照
21:00～21:10	休憩（10分間）		
21:10～22:30	懇親会	元 木	
22:30	中締め		
23:00	就寝		

### 第2日目 10月20日(日)

時刻	項目	担当	参照ページ
7:30～	朝食		
8:30～10:00	プログラム 「科目設計2：授業内容の作成」	佐 藤	P. 14参照
10:00～10:10	休憩（10分間）		
10:10～11:40	プログラム 「科目設計3：シラバスの完成」	小 田	P. 16参照
11:40～	昼食		
12:30～14:00	プログラム 「授業方法の改善」	小 田	P. 18参照
14:00～	修了式	小 田	
14:30	送迎バス 蔵王山寮出発		
16:00頃	大学到着 解散		

#### 【留意事項】

セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。

セミナー期間中の個人の呼称は、「 さん」とします。

食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。

1日目の入浴時間は設けておりませんので、18:00～19:30の時間帯で御利用ください。

起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。

退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。

## 参 加 者 名 簿

所属部局	氏 名	専 門 分 野	グループ	部 屋 割	
人文学部	澤田 裕治	西洋法制史，比較法制度史	A 班 [ ガルウィング班 ]	ちんぐるま	
人文学部	中村 三春	文学，文化論			
教育学部	金井 雅之	社会科教育			
理学部	栗原 正人	錯体材料化学		[ ベ に ば な 班 ]	しゃくなげ
医学部	齋藤 明子	地域看護学			五 色
工学部	勝山 哲雄	物理化学，錯体化学			しゃくなげ
工学部	野村 保友	生体システム			
農学部	加来 伸夫	微生物生態学			
人文学部	田村 陽子	民事訴訟法	B 班 [ ベ に ば な 班 ]	五 色	
教育学部	須賀 一好	国語学		こぶし	
教育学部	坂井 伸之	理科教育			
理学部	辻村 東國	植物生態学			
医学部	中野 知之	細胞生物学			
工学部	石川 優	高分子物性		くろゆり	
農学部	五十嵐喜治	食品栄養化学			
人文学部	伊藤 豊	比較文化，比較文学	C 班 [ 蒙 古 班 ]	こまくさ	
教育学部	大森 桂	家政教育		五 色	
理学部	高橋 良雄	量子多体物理，原子核理論		こまくさ	
理学部	丸山 俊明	地質学・古生物学			
医学部	菅井 幸雄	腹部放射線診断		あざみ	
工学部	近藤 和弘	情報通信学，音響信号処理			
農学部	中島 勇喜	森林影響学			
人文学部	芦立 一郎	中国文学，中国語学	D 班 [ ま ぜ ご 班 ]	ききょう	
教育学部	江間 史明	社会認識教育学		五 色	
教育学部	高 吉嬉	社会科教育		ききょう	
理学部	伴 雅雄	火山学		りんどう (下)	
工学部	高橋 一郎	機械工学，熱工学			
工学部	安達 義也	物理学			
農学部	小山 浩正	地域生態学			
人文学部	富田かおる	英語音声学	E 班 [ 天 津 班 ]	五 色	
教育学部	鈴木 隆	理科教育		いわかがみ	
理学部	村林 直樹	整数論			
医学部	古瀬みどり	臨床看護学（急性期）		五 色	
工学部	横山 晶一	自然言語処理		いわかがみ	
工学部	本谷 秀堅	計測工学			
農学部	夏賀 元康	農業機械システム工学			
学 長	仙道富士郎	免疫学・寄生虫学	名 誉 修 了 生		
副 学 長	鬼武 一夫	生殖生物学	プロデューサー	刈 田	
教育学部	小田 隆治	生物学	ディレクター・講師	りんどう (上)	
人文学部	元木 幸一	西洋美術史	講 師		
理学部	佐藤 泰哲	湖沼化学	講 師		
学務部	木原 英三		事 務	刈 田	
学務部	加賀 良明		事 務		
学務部	阿部 研一		事 務	地 蔵	
学務部	鈴木 則雄		事 務		
学務部	蜂屋 大八		事 務		

# オリエンテーション

(担当：小田)

## 1 F Dの必要性

大学の社会的教育責務の明確化

大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革

大学生の質の変化への対応

## 2 合宿セミナーの目的

教官個人が大学を支えること的位置付け

教育の基本的構成要素，大学における各科目の存在意義，授業設計，成績評価法などをあらためて整理する。

教員相互の交流

## 3 セミナー形態

体験型のセミナーで，セミナー自体がグループ学習形式であり，参加者は，学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

参加者によるセミナー全体の運営

セミナーのグループ構成：5班

各班は，各学部1名ずつと委員1名の全体で7名とする。班の構成員の年齢は幅広くする。

各プログラムに，毎回，総合司会者と記録係を置く。(各班の持ち回り)

各班に，毎回，司会者と記録係，発表者を置く。(持ち回り)

全体と各班の記録係は，各プログラム終了後に記録を提出(この記録は，コピーした後，速やかに全班に配布)

参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で，各参加者が各班の発表と質疑応答に対し，5段階で評価を与える。(この評価は，毎回回収し，整理した後，速やかに掲示する。)

合宿セミナーに関するポストアンケートを実施

## 4 各プログラムの基本的形態

各プログラムの講師による作業内容の説明 10分

グループ作業 40分

発表 各グループ 20分

(各グループの発表時間4分×5班)

全体討論 20分

全体で 90分

平成14年度 第2回山形大学教養教育FD合宿セミナー  
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」

セミナーの形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

参加者によるセミナー全体の運営

班構成：5班 各班は、各学部1名ずつと委員1名の7名とする。班の構成員の年齢は幅広くする。班は、参加者を見て、当日までに委員会で決定しておく。

なお、セミナー期間中は、班のメンバーを入れ替えない。

各セミナーに、毎回、司会者と記録係を置く。(各班の持ち回り)

各班に、毎回、司会者、記録係及び発表者を置く。(持ち回り)

各プログラムの基本的構成

各プログラムを担当する講師による作業内容の説明	10分
班ごとの作業	40分
発表 各班の発表時間4分×5班	20分
全体討論	20分

全体と各班の記録係は、A4版1枚程度に記録をまとめ、各プログラム終了後に提出する。(この記録は、コピーした後、速やかに参加者全員に配布)

参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表(各4分で計20分)と質疑応答に対して評価する。5段階評価とし個人は15点の持ち点を有する。(この評価は、毎回回収し、整理した後、速やかに全班に配布)

プログラム 「山形大学のニーズと課題」

各班同じテーマ 次のプログラムも念頭に置く。

山形大学の分析

- ・山形大学の置かれている状況分析
- ・社会的ニーズ
- ・長所
- ・短所
- ・現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラム 「山形大学をどのような大学にするか」

プログラム の問題点等を踏まえた上で、山形大学の教育機能を十分に発揮するためには、これからどのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。

山形大学の理念・目標を実現するための具体的な行動目標、山形大学の「個性」と「売り」をどうするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

山形大学の「売り」を作る企画が求められる。

理念・目標

- ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
- ・個性的な山形大学像(理念・目標, キャッチフレーズ)

方略(考えられるいくつかの方法, 実現の可能性)

実行計画(主な活動, 資源, 時期, 担当, 責任, 具体的企画書等)

- ・その宣伝・普及の方法(3年計画案)

評価(測定方法, 学生, 教員)

- ・目標が達成できたかどうかを検証する。

## プログラム 「科目設計 1：授業名と目標の設定」

各授業に分かれ、以下の指定された授業において適当な科目を作り、その科目名（名は体を表す科目名）とその学習目標を明らかにする。履修の時期も明確にする。

- A 班：複数分野担当教官による授業
- B 班：山形大学の個性を発揮する授業
- C 班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- D 班：小グループ方式，学生主体型授業
- E 班：小白川と医・工・農の3学部を結びリモート授業

## プログラム 「科目設計 2：授業内容の作成」

学習方略

授業内容（順次性を踏まえて設計）

授業の方法（講義，ビデオ，見学，調査，討論，担当教員等）

ここでは、「科目設計 1」で作った科目の授業内容を設計する。原則として、週に1回90分授業を15回実施するとして、15回分の授業内容（方略）を設計する。授業の順序と各回の内容，授業法，媒体，資源などを現実的に示す。方略を設計するに当たり、目標の修正が必要になるかもしれない。この場合は、目標を手直しする。

## プログラム 「科目設計 3：シラバスの完成」

「科目設計 2」で設計した授業内容を手直しし、「評価」の項を加え、シラバスを完成させる。

成績評価

評価項目

評価方法

評価比重（%）

## プログラム 「授業方法の改善」

各々の授業での問題点，そしてその改善点を挙げ，良い授業になるように具体的な工夫を提示する。（双方向性の工夫）

- A 班：リレー方式授業
- B，C 班：100名以上の講義科目
- D，E 班：20名程度の少人数セミナー

## プログラム 「山形大学のニーズと課題」

(担当：小田，L.A：元木，佐藤)

各班同じテーマ プログラム も念頭に置く。  
現実的，具体的に解析する。

- 1 山形大学には何が求められているか？
  - ・社会は山形大学に何を求めているか？
  - ・学生のニーズ
- 2 山形大学の置かれている状況分析
  - ・そこには，どのような課題（問題）があるか？
  - ・長所
  - ・短所
  - ・その生じさせている理由・原因は何か？
- 3 現実的な制約・問題点，改革の必要性など

## プログラム 「山形大学をどのような大学にするか」

(担当：小田，L.A：元木，佐藤)

プログラム の問題点などを踏まえた上で，山形大学の教育機能を十分に発揮するには，これからどのようなことを考え，実行していかなければならないか，具体的に提案する。山形大学の理念・目標を実現するための具体的行動目標，山形大学の「個性」と「売り」をどのようにするか。すべての班が同じテーマであるが，個性あふれる現実的企画を期待する。  
山形大学の「売り」を作る企画が求められている。

- 1 山形大学の理念・目標
  - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
  - ・個性的な山形大学像（理念・目標，キャッチフレーズ）
- 2 方略（考えられるいくつかの方法，実現の可能性）
- 3 実行計画（主な活動，資源，時期，担当，責任，具体的企画書など）
  - ・その宣伝・普及の方法（3年計画案）
  - ・組織論（学部，学生の入口と出口（入試制度と就職），学長と副学長制，委員会など）
- 4 評価（測定方法，学生，教員）
  - ・目標が達成できたかどうかを検証する



# プログラム 「科目設計 1：授業名と目標の設定」

(担当：元木，L.A：小田，佐藤)

## ここでの課題

シラバス作成作業の第1段階として、各グループごとの課題に対応した授業名と学習目標の設定を行う。

プログラム ~ の各グループの課題

- A班：複数分野担当教官による授業
- B班：山形大学の個性を発揮する授業
- C班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- D班：小グループ方式，学生主体型授業
- E班：小白川と医・工・農の3学部を結びリモート授業

**作業1** 授業名の決定： (仮称) 内容確定後，最後に決定？

**作業2** 学習目標の設定

1 踏まえておくべきことから：

- (1) 教員中心ではなく，学生による学習を中心に考える(教員の果たすべき役割の再検討)
- (2) 山形大学に対する社会的ニーズ
- (3) 山形大学の全体的な教育目標

註：(1)について

大学の役割

講義の提供

学生から独立

学力差を明確にする

成功へ向けて

伝授する資源の重視

資源の量と質の重視

入学生の質の重視

カリキュラムの発展と拡大

大学の質・内容の質

使命

知識の提供・伝授

コース・プログラムの提供

教育の質の改善

多様な学生への対応

教育

教員中心・知識伝授

教育の質

指導者としての教員

個人的・受動的学習

学習方法と教育方法のデザイナー

教員と学生を一つのチームと考える

すべての学生の能力と才能を引き出す

学習と学生の成功の産物を重視

産物の量と質を重視

卒業生の質を重視

学習技法の発展と拡大

学生の学習の質

学習を生み出し，知識の発見と形成へ

強力な学習環境の提供

学習の質の改善

多様な学生を卒業させる

学生中心・知識発見

学習の質，学習効果・効率

学生の才能・能力を引き出す助言者

共同的・行動的・能動的学習

2 学習目標の記述

各科目の学習目標を表現することの必要性とその表現方法を学ぶ。学習の効果は，教育の受け手(学習の主体)である学生の変容で評価されるべきである。そのために，授業の目標と到達目標を定める。

註：授業の目標を作成する際の注意点

原則

- (1) 学習者を主語として書く

(2) 学習の結果、いかなることができるようになるかを明示する

記述内容

(1) 知識・技能の学習がなぜ重要か。それによって学生の要求がどのように満たされるかを明示する。

(2) 複雑・総括的な概念を持つ動詞を用いる。

知る，認識する，理解する，感ずる，判断する，評価する，考察する，位置付ける，実施する，適用する，示す，創造する，身に付ける，等々

単純な行動を示す動詞は用いない(述べる，列挙する，選ぶ，記載する等々)

(3) 必要な目標分類(認知・態度・技能)を総括的に含める。

註：到達目標を作成する際の注意点

授業の目標を達成するためにどのようなことができるとよいか，具体的に明示する。

(1) 学習者を主語として書く

(2) 動詞を含むこと

(3) 「理解する」のような概念的言葉ではなく，観察可能な行動を具体的に表す

(4) 授業の目標と関連していること

(5) 到達レベルを書く

(6) 認知，態度，技能を分けて書く

知識(認知領域)：知識を得て理解し，一定の能力を獲得する

述べる，説明する，分類する，比較する，解釈する，推論する，一般化する，適用する，結論する，批判する，評価する，等々の動詞

技能(精神運動領域)：知識・能力を活かして意識的・具体的に行動する

感ずる，始める，模倣する，工夫する，行う，創造する，触れる，調べる，準備する，測定する，等々の動詞

態度・習慣(情意領域)：獲得した知識・能力を，情報として相互に提供・交換し合う

行う，コミュニケーションする，協調する，示す，表現する，系統立てる，参加する，応える，等々の動詞

## プログラム 「科目設計2：授業内容の作成」

(担当：元木，L.A：小田，佐藤)

### ここでの課題

プログラム「科目設計1」で作成した授業について，学習方法と道筋(戦略，学習方略)を明示する。具体的には，学習者が到達目標に達するために必要な学習方法の種類と順序を示す。

### 作業

原則として，週に1回90分の授業を15回実施するものとして，授業の内容を考えてみる。その際，授業の順序と各回の内容，学習法，利用する媒体，資源などについて明示する。内容によっては，授業の目標，到達目標，さらには科目名についても変更が必要になるかもしれない。

註：学習方法の種類

(1) 受動的学習法：講義など

(2) 能動的学習法： グループ討議(演習，セミナー，ディベートなど)  
実験・実習

自習(読書，個人研究，コンピュータ活用学習など)

註：学習のための資源

(1) 人的な面で：

(2) 物的な面で： 場所

(3) 予算

プログラム 「科目設計3：シラバスの完成」

（担当：佐藤，L.A：元木，小田）

ここでの課題

プログラム 「科目設計2」で作成した授業について，シラバスを完成する。

成績評価

その位置付け

- (1) 教育評価は，学生，教員，カリキュラム（目標，学習方法の立案（方略），評価）の三者が対象
- (2) 成績評価は，その中の一つ。

留意点

- (1) どの行動領域を評価するか
  - 知識（認知領域）
  - 技能（精神運動領域）
  - 態度・習慣（情意領域）
- (2) いつ評価するか
  - 学習前（プレテスト）
  - 学習中（中間テスト）
  - 学習終了後（ポストテスト）
  - フォローアップ・テスト
- (3) 評価の目的
  - 形成的評価：学生が理解している点，理解が不足している点を発見し，学習法，教授法へのフィードバックが目的。最終評価の参考にしない。
  - 総合評価：到達目標に対する学生の到達度を計測する。
- (4) いかに評価するか，複数の評価項目のウェイト
  - 論述試験
  - 口頭試験
  - 客観試験
  - 実地試験
  - 観察試験
  - 論文（レポート）

評価の持つべき性格

- (1) 妥当性：計測しようとする項目を計測できる方法か？
- (2) 信頼性：計測結果の再現性は良いか？
- (3) 客観性：計測者（教員）が替わっても，同じ結果が得られるか？
- (4) 効率性：経済的にも時間的にも実用的か？
- (5) 特異性：なぜ，そういう解答がなされたか分かるか？

# プログラム 「授業方法の改善」

(担当：佐藤，L.A：元木，小田)

## 各グループの課題

- A班 : リレー式授業
- B, C班 : 100名以上の講義科目
- D, E班 : 20名程度の少人数セミナー (実験・実習・演習等を含む)

### 学習方法のいろいろ

- 1 受動的学習法
  - 1) 講義など
- 2 能動的学習法
  - 1) グループ討議 : セミナー, 小グループ討議, ディベート, ワーク・ショップ, ケース・スタディなど
  - 2) 実習 : XX実験, YY実習, フィールド・ワーク, ロール・プレイ, シミュレーション実習など
  - 3) 自習 : 読書, 宿題, VTR学習, テープ・スライド学習, プログラム実習, コンピュータ活用学習, マルチメディア, インターネット, 個人研究など

### 学習資源のいろいろ

- 1 人的資源
  - 教員, 外部講師, ティーチング・アシスタントなど
- 2 物的資源
  - 1) 場所 : 講義室, 実験・実習室, 体育館, グラウンド, 講堂, コンピュータ室, マルチメディア室, 学外施設など
  - 2) 媒体 : スライド教材, スライド・プロジェクター, OHP教材, プリント, 教科書, 標本, テープ, VTR, コンピュータなど
  - 3) 予算

授業形態, 学習方法それぞれに長所と短所がある。それぞれの授業形態, 学習方法の長所と短所を解析し, 学習方法, 学習資源などを工夫し, それぞれの授業形態の長所を伸ばし, 短所を改良する実現可能な具体的提言をまとめる。

## プログラム 「山形大学のニーズと課題」

### グループ作業記録

#### ガルウイング班

司会者 金井 雅之  
記録者 栗原 正人  
発表者 金井 雅之

#### 山形大学に何が求められているか？

専門的知識（どこの大学でも同じ）。  
独自性のある全学的な領域を超えた分野の確立。  
企業人（就職先）を念頭に置いた教育（出口の強化）。  
将来の目標を早く決める学生主体の教育体制。  
就職先の実践をあげる教育。  
転学科，転学部が可能なシステム。  
小グループ教育。  
入学時から研究論文に取り組む（教養教育卒業研究）。  
専門性の高い分野と幅広い学問分野（目的意識の低い学生に対して）を設ける。  
メディアを利用した（テレビ・HPなど）広告。  
達成目標（就職先など）を明確に打ち出せる学部作り。  
学生と教官の密接な関係（入学時から）  
新領域（学部を超えた，年限を決めた）を設けて，学生の教育に当たる。  
テーマは地域のニーズに合わせる。  
倫理教育も重視する。  
教養教育の名称変更

#### まとめ

- (1) 専門性の高い分野と幅広い分野（新領域）の設定
- (2) メディアを活用した広告（大学の目指すところ）
- (3) 教養教育の名称，倫理教育の重視（人間性教育）



## べにばな班

司会者 須賀 一好  
記録者 五十嵐喜治  
発表者 石川 優

### 1 何が求められているのか

社会が求めているもの

- ・地域に特色のあることを学べること。研究できること。
- ・卒業後、現場で実際に活躍できる人が養成できること。(工)
- ・地域で学んだことを中央でも応用できるような人が養成できること。(農)
- ・ジェネラリストからプロフェッショナル養成の要求(人文)

学生のニーズ

- ・入学時点では明確なニーズがないので、入学後にニーズを見出せるような教育を心がける。

### 2 状況分析

- ・長所：少人数教育である。目が行き届いている。
- ・短所：学生の目的意識が低い。分散キャンパス。

### 3 制約・問題点、改革

- ・リカレント教育など社会人を対象とした教育が可能な教育の場を設ける。
- ・地域の人から教えてもらったり、地域への教員からの情報発信を行うことが大切。
- ・特化できるところは可能な限り特化した教育・研究を行う。

## 蒙 古 班

司会者 大森 桂  
記録者 高橋 良雄  
発表者 伊藤 豊

総合大学の特色を活かす

- ↑
- ・学生の立場
  - ・魅力
- ↓
- ・教職員の立場

分散キャンパス 統合 現実的に難しい

地域との連関を深められる点もある。 人材の供給

(総合大学の魅力を薄める側面もある。)

地域とは山形限定ではなく東北全体を視野におくことも大事 実態と合っている。

分散キャンパスの問題

学生の教育・・・早く専門と接しさせたい。

- ・集中開講・・・教養教育を実施 教官の負担との兼ね合い。
- ・専門への興味を失う。

→ 分散側の要求

実態の調査

学生のニーズ、意向を調査する必要がある。

分散キャンパスのままであれば大学にその担当(調査,企画する)者を置く必要がある。

## まぜご班

司会者 芦立 一郎  
記録者 江間 史明  
発表者 伴 雅雄

### 1 山形大学に何が求められているか

(社会から)

地域との密着

“どーぞいらっしゃい”よりも、「地域に出ていくこと」

「地域に出ていって問題をほりだすこと」

むずかしい

実学的なもの           これはできる

基礎学制的なもの       ?

学際的なもの           雪なら雪ときめて各学部からアプローチする

(学生から)

いい就職したい。幸福を求めたい。他方、不安も抱えている。

### 2 山形大学の置かれている状況分析

短所    タコ足大学

ex) 米沢   キャンパスとしての教育力が弱い。(刺激が弱い)

鶴岡   同じ。

でも、演習林などフィールドが近いことの期待。

異文化へ接する機会が少ない。

長所    自然。人間味がある。

別から見れば、いろんな「地方」を持っているという長所。

### 3 現実的な制約・問題、改革の必要性

・学生が、地域を理解できるような機会をふやす。

地元の企業現物で見る。希望者は少ない。

・学生が、自分が進もうとする道に期待と誇りが持ちにくい。

ex) 工学部であれば、エンジニアとしての期待と誇り、目的を持たずにキャンパスでうろうろしている。

・農学部1年生   2日間演習林フィールドに出す。刺激にはなる。

・教官が忙しい。フィールドに出るといっても、出にくい。



## 天 津 班

司会者 富田かおる  
記録者 鈴木 隆  
発表者 村林 直樹

中期目標の設計 トップダウン ボトムアップ

地域レベルか全国レベルか

地域発の全国 ・資質のある学生を育てる 人材を育てる

・有名大学の通信教育の出先化

地方大学の弱み。情報の不足 個人のアピールを統合する。

学生は意欲を持っている。その意欲をサポートする体制 教育課程の問題

自己教育力のある学生。

学生の質が素朴である。

学生の意欲（技術をつけたい）がある。

教官の出身大学が多様。

学生のレベルアップができる。

長所

刺激が少ない，ネームバリューの問題。環境の貧しさ。学生の経済力が低い。

短所

分散キャンパスが欠点。

教養教育の実質化。

## 全体会記録

総合司会 澤田 裕治  
記録者 中村 三春

中村（人）：大学全体のカラーを考えるべき時期に来ているのではないだろうか？

石川（工）：各学部を超えた認識の必要性は何か？

仙道（学長）：それほど特異な意見は出てこなかった。そういう視点を養う場を作ってこなかったのは私の責任。今後は，その点からも大学の評価が出される。

中村さんの言われた人間性の問題は外せない。社会で，必要とされる実学を教えなければならない。そのためには教養教育のカリキュラムを変えていかねば。

鈴木（教）：参加者のメンバーのスタンスが個別なので，なかなか考える時間が足りない。

芦立（人）：人間性の教育は教養教育で可能だろうか？

中村（人）：少人数ゼミによる教養教育卒業研究のような形で，創発性・主体性を養うことができるのではないかと？





## グループ作業記録

### ガルウイング班

司会者 栗原 正人  
記録者 齋藤 明子  
発表者 栗原 正人

#### 1 山形大学の理念・目標

- ・送り出す人材像（社会貢献など）を特化（明確化）する。  
（ex.ものづくり，企業人，一次産業，二次産業，情報・・・）
- ・社会のニーズに答える（企業とのプロジェクトなど）。  
手作り大学（ベルトコンベアに学生を乗せて，たくさんの教員が手を出す形ではない，学生主体の学生の手によって作られる。）

#### 2 方略

- ・基礎教養（ex.読み書きそろばん，情報処理，倫理）は必修，専門に活かす教養（専門基礎）は選択できる。実践的，何か製作する。（レポート，ものづくりなど）
- ・各学部で行っていることを宣伝する。HP，オープンキャンパス。
- ・複数分野教官の間での目標設定，年次計画，プロジェクト。
  - ・いろいろな視点での教育
  - ・あることをテーマに，お互いの知識・技術の交流をはかる。

#### 3 実行計画

- ・入学直後から長期のゼミ（基礎ゼミ）に参加する。（教員，先輩，仲間から学ぶ）  
・・・実践的  
学生が教員を選ぶ，製作と発表を義務にする。
- ・運営  
実行がスムーズに行く組織を作る。学部横断的。  
HP作成で発信。意見をもらい易く。

#### 4 評価

- ・教員の到達度によるペナルティー制。
- ・教員の義務を数値化。
- ・就職先からの評価を蓄積する。
- ・卒業後の学生からの評価。
- ・企業人から大学の講義を評価してもらう。

## べにばな班

司会者 五十嵐喜治  
記録者 石川 優  
発表者 坂井 伸之

### 1 理念・目標

- ・専門性 非専門性
- ・個性を育む大学
- ・各学部の特徴を活かし，特化した大学。
- ・少人数教育

### 2 方略

- ・計画 学生の意見をカリキュラムに
- ・帰属意識 イベントを行う
- ・入学前の学生に宣伝 オープンキャンパス，出前教員研修，教官の倫理

### 3 実行計画

- ・個性を育む大学 ソクラテスメソッド

### 4 評価

- ・外部評価，自己評価

## 蒙 古 班

司会者 丸山 俊明  
記録者 菅井 幸雄  
発表者 大森 桂

### キャッチフレーズ：「最上川大学」

上流：米沢，中流：山形，下流：鶴岡，日本海：海外へとつながる。

地域密着から世界へと広がる。分散キャンパスの利用。

流れが連続，ゆっくり流れる。上り，下りが可能（柔軟＋密着）。

単位互換，単位制の重視（年限よりも）。

サテライトをハイテクで結びつける。

転学部・転学科の柔軟性。

留年率の低下，飛び級への取り組み。

留学生の受入拡大。

問題点：資格（医，教育）取得と他学部の就職率，社会への還元との差別化。

留学生受入体制の不備。

ハイテクには，金，人，技術の問題。



## まぜご班

司会者 高 吉嬉  
記録者 高橋 良雄  
発表者 安達 義也

### フリー

- ・自立した人間を育てる。教えられすぎてきた学生を育てる教育。  
一生のスパンで自分の自己確立をどうするか考えられる学生。
- ・教官は生産者，学生は製品，山大ブランドを作る必要あり。  
論理的思考の訓練ができる大学。
- ・したたかさ。強い精神力を身につけさせたい。人づくり。倫理に裏打ちされた。
- ・人作りと地域作りが必要。両方は無理か。校風とは何か。
- ・逆境に強い。打たれ強い。自然環境が豊か。
- ・言葉と実際社会との乖離。
- ・教育現場は教官と学生間の信頼感が東京より強くあると思う。
- ・進む道に期待と誇りを身につけさせたい。山大卒業生の評価 自信の裏づけ  
フィールドワークで育てる。
- ・大学のレッテル 学生の目 企業（外部）の目 大学の戦略

### まとめ

- ・3P理念，グローバル  
Produce 創造性 Pride 誇り Professional 専門性 responsibility? 責任
- ・タコ足間交流プログラム作り  
まぜごはんプロジェクト 学部間交流フェスティバル 学生参加  
学部間・地域間・世界間・国際交流  
試食会 = 評価測定  
フィールドワーク

## 天 津 班

司会者 鈴木 隆  
記録者 村林 直樹  
発表者 古瀬みどり

- ・まずキャッチフレーズを決める。  
工学部では既に作っている。 “ 自ら新分野を切り開く ”
- ・学部こだわらず入学試験を行う：大学生として一年間勉強して専門を決める。
- ・あなたの一生を面倒みます。 キャッチフレーズ  
社会人になってから起業する時に大学としてサポートする。
- ・学生が複数の分野を専門として専攻できる。
- ・大学で学んだことが社会に出て役に立つんだということを学生に自覚させる。

現実はずしもそうではない!! OBとの関係を深める。

OB再教育またはOBによる学生への授業

OBの大学への回帰 サケマスクラス（OBのためのホームページを作る）

- ・4年制ではなく6年制にしてはどうか？（3年～6年）  
1年間は必ず他学部に行くようにする。
- ・学生の学部間移動が簡単にできるようにする。  
大学に入ってから学生に自分で何を専攻するかを決めさせる。
- ・3年間で卒業できるようにする。
- ・特殊な才能を持った学生をうまく見出し、それを高く評価するシステムを作る。

## 全体会記録

総合司会 中野 知之  
記録者 田村 陽子

### <各学部間の交流について>

中村（人）：天津班の「サケ・マスの回帰率」とはなんですか？

天津班：卒業後も，大学とOBの交流が持続するようにしたい。

起業家を作りたい。：40代が適当。資金面・学業面等の経験あり。

OBとの連絡を密にする。（講演等）門戸開放。

中村（人）：OBが講師等で戻ってくる途を開くのは良い方策だと思う。

### <評価方法について>

仙道（学長）：教官の評価が必要だろう。皆が納得するような形で多角的評価をすべき。

世界的レベルで見ても，国立大学の教官だけが評価を受けていない。

鬼武（副学長）：卒業生に対する手当ができていない（卒業生の意見を聞くページもない）。

学部を定めない入学を認めてはどうか。



# プログラム 科目設計 1 :授業名と目標の設定」

## グループ作業記録

### ガルウイング班

司会者 齋藤 明子  
記録者 勝山 哲雄  
発表者 齋藤 明子

授 業 名 「あなたの知らないリサイクル」

目 的

- ・リサイクルの知識を深める。
- ・自然界・人間社会におけるリサイクルを考える。
- ・学際的な面からリサイクルを考える。
- ・理系，文系の総合授業

到達目標

- ・リサイクルの現場に訪問・実習 施設等
- ・ゴミリサイクル等で社会的システム インセンティブを与えて成功させる。
- ・各学部教官の担当。外部講師による授業なども取り入れる。
- ・学生の積極的参加を求める。レポートで自分の主張。

### べにばな班

司会者 五十嵐喜治  
記録者 坂井 伸之  
発表者 辻村 東國

授 業 名 「ラフランス革命」

目 的 多角的側面から分析能力，創造性を身につける。  
(山形大学の総合性，少人数制を活かす)

到達目標

- ・現状を解析し，計画する能力を身につける。
- ・身近なものを題材に，科学的，哲学的等，多角的な思考ができるようになる。
- ・様々な学問分野が社会に活かされていることを知る。

構 想 下記のテーマについて学生が調べ，発表，討論。  
品種改良，工学，哲学，農薬問題，広告(コピー)，宗教，品質管理，アート，  
流通・経営，文学



## 蒙 古 班

司会者 近藤 和弘  
記録者 中島 勇喜  
発表者 高橋 良雄

授 業 名 「最上川学のススメ」

この中で学生は連続性・リンクの重要性を学ぶ。「つながり」の重要性。  
全人教育の具体例となるのではないか？  
流域の歴史・産業・文化・植物・動物・地質・交通等を学ぶ。  
学部間の壁をこえて、複数教官による授業。ただし、コーディネータが重要。  
公開講座をする。一般の人も聴ける様にする。  
地域からの相談窓口を設ける。 具体的相談となる。

目 的 最上川流域の多面から見て、地域とのつながりを理解する。  
地域の問題点も身につける。

到達目標 基礎コース  
発展コース  
最上川流域についてグループごとにプレゼンテーションをする。  
ポスターセッション。

## まぜご班

司会者 小山 浩正  
記録者 芦立 一郎  
発表者 江間 史明

小グループ「まぜごはんプロジェクト」の展開

各学部 12 × 6 6グループ 各学部で教官 6

授 業 名 「雪・酒・キムチ 山形の文化・多目的研究 」

目 的 山形の風土と文化を多面的に調査する。  
雪・酒・キムチにつき風土・文化的・総合的に探求。現代社会の諸問題。

到達目標 テーマから問題をみつけること。(各分野の学部ごとに調べるに値することを)  
それを調べること、技能を身につける。  
成果をプレゼンテーション(知らない人に対して)。  
専門内・専門外の人への伝達能力を涵養。 オリジナルなレポートを書ける力。  
山形の文化の長所、特殊性を調べ理解する能力を。 学問の楽しさ。  
ディベート 各学部内 まぜごはんとして、学部を超える。

## 天 津 班

司会者 村林 直樹  
記録者 古瀬みどり  
発表者 横山 晶一

授 業 名 「まるごと人間学」

- ・小白川から始まり，他のキャンパスに主体が移る。メタグループディベート。
- ・テーマは教員が用意し，そのテーマにふさわしい教員を学生が連れてくる。  
(各学部1テーマ) そのテーマについて，4週講義 教官のディベート
- ・教官と学生を交えてディベート  
ex.臓器移植 各学部から学部の独自性に関係した意見を出してもらう。

目 的 1つのテーマについての様々な見方を理解し，身につける。

到達目標 分野を超えた議論  
異文化コミュニケーション  
情報公開  
インフラの改善がまず必要。

## 全体会記録

総合司会 中島 勇喜  
記録者 伊藤 豊

中村(人): 第1に，まぜご班の「雪・酒・キムチ」では，1年次学生に学部レベルの専門性をどの程度要求するのですか？

第2に，「キムチ」に代表される異質な文化を山形的なものの理解にいかに関係を反映するのですか。

まぜご班: 1年次学生の専門性については，よく考えるべき問題です。

「山形的なものの理解」については，国際結婚の問題などを含めて，山形の文化をこれから造っていくものとして教授します。

中村(人): べにばな班の「ラフランス」と山形大学の個性のつながりはなんですか？

田村(人): 「ラフランス」は身近な問題として取り上げました。

鬼武(副学長): 教養教育は大人数の講義が多く，少人数を前提とする授業は計画していくのは難しいのではないかと？

高橋(理): 教室での座学は大人数で良いが，フィールドワーク/トリップは少人数で行う必要がある。教養教育としては，両方のアプローチを組み合わせることが必要。

中島(農): 天津班の「担当教官間のディベート」とはどのようなものか？

横山(工): 各教官の講義のずれを教官の間で公開で議論し，それに学生を積極的に取り込んでいくもの。

# プログラム 科目設計 2 :授業内容の作成」

## グループ作業記録

### ガルウイング班

司会者 勝山 哲雄  
記録者 野村 保友  
発表者 勝山 哲雄

授業名 「あなたの知らないリサイクル」

#### 授業概要

- 初回 人文学部教官が講師。70分レクチャー，20分で小レポート  
イントロ はじめにレポートを書かせる。(動機付け)  
リサイクル全般の説明。
- 2 - 3回目 理学部教官 CO<sub>2</sub>問題 エネルギーと物質循環
- 4 - 5回目 工学部教官 人工光合成
- 6 - 7回目 農学部教官 微生物によるリサイクル
- 8 - 9回目 医学部教官 人間リサイクル
- 10 - 11回目 人文学部教官 社会システムとリサイクル 環境倫理
- 12 - 13回目 教育学部教官 公害問題 リサイクル社会のため制度設計
- 14回目 外部講師 市民とリサイクル
- 15回目 ポスター発表：まとめ





## べにばな班

司会者 坂井 伸之  
記録者 辻村 東國  
発表者 中野 知之

授 業 名 「ラフランス革命」

### 授業概要

#### (基礎編)

- |   |                      |       |        |
|---|----------------------|-------|--------|
| 1 | 農場見学...ラフランスの生き様を知る。 |       |        |
| 2 | 「ルーツから見た品種改良」        | ... 1 | 講義     |
| 3 | 〃                    | ... 2 | グループ討議 |
| 4 | 「ラフランスの値段の決め方」       | ... 1 | 講義     |
| 5 | 〃                    | ... 2 | 実習     |
| 6 | 「農薬, その功罪」           | ... 1 | 講義     |
| 7 | 〃                    | ... 2 | グループ討議 |
| 8 | 「芯からプラスチックボトルを作る」    | ... 1 | 講義     |
| 9 | 〃                    | ... 2 | 実験     |

#### (応用編)

- |    |               |       |    |
|----|---------------|-------|----|
| 10 | 「キャッチコピーを作る」  | ... 1 | 講義 |
| 11 | 〃             | ... 2 | 実習 |
| 12 | 「ラフランスでアートする」 | ... 1 | 講義 |
| 13 | 〃             | ... 2 | 実習 |
| 14 | 「ラフランス・ポエム」   | ... 1 | 講義 |
| 15 | 〃             | ... 2 | 実習 |

### 学習方法

講義で課題を与える。

能動的学習法 グループ討論 発表会(自己評価)

実験・・・プラスチック作成実験

自習



## 蒙 古 班

司会者 伊藤 豊  
記録者 大森 桂  
発表者 丸山 俊明

授 業 名 「最上川学のススメ」

### 授業概要

- 1 オリエンテーション
- 2 最上川概論
- 3 最上川の砂防と治山。
- 4 山形大海牛
- 5 出羽の国が海だった頃。
- 6 最上川流域の食文化
- 7 最上川流域の産物
- 8 人の流れと川の流れ 中・近世の最上川流域
- 9 文学・思想に現れた最上川（人々は“最上川”をどう見たか）
- 10 各地の公立中枢病院の役割と救急体制の現状。
- 11 検診業務の現状と地域性。
- 12 山形の現代産業の成立と発展と地域性
- 13 山形の産業と世界の結びつき。
- 14 最上川における新しいディスプレイデバイスの発展。 米沢の研究開発
- 15 最上川における新しいディスプレイデバイスの発展。 天童の製品化  
(東北パイオニア卒業生)

## まぜご班

司会者 高橋 良雄  
記録者 伴 雅雄  
発表者 高 吉嬉

授 業 名 「雪・酒・キムチ 山形の文化・多目的研究 」

### 授業概要

- 1 オリエンテーション
- 2 } 各学部，グループ毎に検討：問題発見 宿題：調査
- 3 } 雪 " : 追求，まとめ，集約
- 4 } まぜごはんグループで検討（各グループ30分くらい）
- 5 } 山形と雪との多面的追求
- 6 } まぜごはんグループ（各自）でレポートを書く
- 7 } 酒 同上 ・酒をテーマに
- 8 }
- 9 }
- 10 }
- 11 } キムチ 同上 ・キムチをテーマに
- 12 }
- 13 }
- 14 各学部グループ内の発表 個人レポート
- 15 全体発表会（代表者 各学部グループから）

## 天 津 班

司会者 古瀬みどり  
記録者 横山 晶一  
発表者 本谷 秀堅

授 業 名 「まるごと人間学」

### 授業概要

- 1 } テーマ1 臓器移植 司会：医学部
- 2 } 医 話題提起（現状），工 MRI ， 農 臓器提供動物，
- 3 } 人文 倫理・法律， デイベート
- 4 } レクチャー1時間，残りは質問
- 5 }
- 6 } テーマ2 食の安全 司会：農学部
- 7 } 農 話題提起 残留農薬， 医 食と心，食への俗信，食べ合わせ，
- 8 } 工 添加物， 理 環境問題， デイベート
- 9 }
- 10 }
- 11 } テーマ3 福祉工学 司会：工学部
- 12 } 工 人間の身体機能の補助， 農 園芸療法， 教育 生涯教育，
- 13 } 医 老人介護， デイベート
- 14 }
- 15 }

・各テーマで1回レポート 異なるキャンパスの教員が評価 計3回  
予め調べたことと各テーマの終わりに感じたことを合わせて書く。

## 全体会記録

総合司会 安達 義也  
記録者 小山 浩正

中村（人）：べにばな班の「ラフランス革命」で、ラフランスは身近な問題の象徴だったのではないか？ また、「山形大学の個性＝山形の個性」ではないのではないか？

べにばな班：「ラフランス」とは、地域性と総合大学も考慮している。

伊藤（人）：到達目標とのつながりはどうか？

べにばな班：多角的なものを見方をつちかう。

司会：もうこ班の到達目標との整合性はどうか？

蒙古班：地域の自然・文化を学ぶ、複数教官による全人教育である。

講義を基本とし、フィールドトリップなどは発展として考えている。

中村（人）：天津班の「まるごと人間学」の方式は興味あるが、人的パワーと要求水準が見合っているか？

天津班：見合っている。12人の教官は交互にやるので、それほど負担ではない。

司会：ガルウィング班のポスターセッションとはどのように考えているのか？

ガルウィング班：レポートではなくポスターの方が良いと判断した。

# プログラム 科目設計 3 :シラバスの完成」

## グループ作業記録

### ガルウイング班

(授業科目名) あなたの知らないリサイクル(総合)	(開講学年) 全学年
(授業英語名) Recycle, you don't know	(開講学期) 前・後期
(担当教官) (ローマ字) 6 学部教官	(単位数) 2 単位
(開講形態) 講義(リレー方式)	
(教官の所属) 理・工・農・医・人・教	
(授業概要) (学習目標) 自然・人間・社会など諸領域にわたり、学際的な点からリサイクルの知識・認識を深める。 (到達すべき目標) 授業を通して、リサイクルを理解し、実習にて身をもって、見る、触れる、経験をする。 レポートで自分の主張を具体的に表現する。	
(授業計画) 初回にリサイクル全般の説明を行う。以降、以下のテーマで各学部の教官が、講義を行う。 2 ザ・グリーンケミストリー(理)(CO <sub>2</sub> 削減・還元) 3・4 光(エネルギーと物質循環)(工) 5・6 生き物の力(バイオテクノロジー)(農) 7・8 新老人力(元気老人の生きがい作り)(医) 9・10 社会システムとリサイクル(環境倫理)(人) 11・12 リサイクル社会のための制度設計(教) 13 市民社会リサイクル(外部講師) 14 ポスター発表 15 特定テーマについて口頭発表	
(成績評価の方法) 小レポート回(15分位) 最終レポート(ポスター発表)1回(5回以上レポートを提出した者)	
(テキスト)	
(参考書)	
(その他) (履修に当たっての留意点)	
(学生へのメッセージ等)	
(担当教官の専門分野)	
(自由記載欄)	

べにばな班

(授業科目名) ラフランス革命(総合セミナー)		(開講学年) 1学年																																					
(授業英語名) La France revolution		(開講学期) 後期																																					
(担当教官) 須賀一好(代表)		(単位数) 2単位																																					
(ローマ字) Suga Kazuyoshi		(開講形態) 講義・演習																																					
(教官の所属) 教育学部																																							
(授業概要) (授業目標) 少人数制クラスにより、学生が主体的に参加できる授業である。大きなテーマのもと、複数の教官が講義をすることで、多角的な面からの分析能力を身につける。 (到達目標) ラフランスという身近なものを題材として科学的芸術的な思考ができるようになる。かつ、様々な学問分野が社会に生かされていることを知る。																																							
(授業計画) <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 25%;">1. 農園見学</td> <td style="width: 25%;"></td> <td style="width: 25%;">10. キャッチコピーを作る</td> <td style="width: 25%;">(講義)</td> </tr> <tr> <td>2. ルーツから見た品質改良</td> <td>(講義)</td> <td>11. “</td> <td>(討論)</td> </tr> <tr> <td>3. “</td> <td>(討論)</td> <td>12. ラフランスでアートする</td> <td>(講義)</td> </tr> <tr> <td>4. 農薬, その功罪</td> <td>(講義)</td> <td>13. “</td> <td>(討論)</td> </tr> <tr> <td>5. “</td> <td>(討論)</td> <td>14. ラフランスラブソディー</td> <td>(講義)</td> </tr> <tr> <td>6. ラフランスの値段のつけ方</td> <td>(講義)</td> <td>15. “</td> <td>(討論) (討論)</td> </tr> <tr> <td>7. “</td> <td>(講義)</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>8. 芯からプラスチックボトル</td> <td>(討論)</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>9. “</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>				1. 農園見学		10. キャッチコピーを作る	(講義)	2. ルーツから見た品質改良	(講義)	11. “	(討論)	3. “	(討論)	12. ラフランスでアートする	(講義)	4. 農薬, その功罪	(講義)	13. “	(討論)	5. “	(討論)	14. ラフランスラブソディー	(講義)	6. ラフランスの値段のつけ方	(講義)	15. “	(討論) (討論)	7. “	(講義)			8. 芯からプラスチックボトル	(討論)			9. “			
1. 農園見学		10. キャッチコピーを作る	(講義)																																				
2. ルーツから見た品質改良	(講義)	11. “	(討論)																																				
3. “	(討論)	12. ラフランスでアートする	(講義)																																				
4. 農薬, その功罪	(講義)	13. “	(討論)																																				
5. “	(討論)	14. ラフランスラブソディー	(講義)																																				
6. ラフランスの値段のつけ方	(講義)	15. “	(討論) (討論)																																				
7. “	(講義)																																						
8. 芯からプラスチックボトル	(討論)																																						
9. “																																							
(成績評価の方法) 演習のプレゼンテーション(質疑応答を含む)を学生が相互評価し、それを参考に教官がつける。																																							
(テキスト) 指定なし。(レジュメ等は配布する)																																							
(参考書) 指定なし。																																							
(その他) <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%; border-right: 1px dashed black;">(履修に当たっての留意点)</td> <td>積極的に参加すること。</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px dashed black;">(学生へのメッセージ等)</td> <td>多方面に興味のある学生を求む。</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px dashed black;">(担当教官の専門分野)</td> <td>国語学。</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px dashed black;">(自由記載欄)</td> <td>多様性の中から自分の専門分野を探索してください。</td> </tr> </table>				(履修に当たっての留意点)	積極的に参加すること。	(学生へのメッセージ等)	多方面に興味のある学生を求む。	(担当教官の専門分野)	国語学。	(自由記載欄)	多様性の中から自分の専門分野を探索してください。																												
(履修に当たっての留意点)	積極的に参加すること。																																						
(学生へのメッセージ等)	多方面に興味のある学生を求む。																																						
(担当教官の専門分野)	国語学。																																						
(自由記載欄)	多様性の中から自分の専門分野を探索してください。																																						

蒙 古 班

<p>( 授業科目名 ) 最上川学のススメ ( 総合領域 )</p>	<p>( 開講学年 ) 全学年</p>
<p>( 授業英語名 ) Toward the “Mogamigawa” Studies</p>	<p>( 開講学期 ) 前・後期</p>
<p>( 担当教官 ) ( ローマ字 ) 中島 ( 代表 ) 丸山 , 大森 , 伊藤 , 菅井 , 高橋 , 近藤</p>	<p>( 単 位 数 ) 2 単位</p> <p>( 開講形態 ) 講 義</p>
<p>( 教官の所属 ) 人・教・理・医・工・農学部</p>	
<p>( 授業概要 ) 山形県の母なる川「最上川」を中心に地域と関連したテーマを各学部の教官が参加して、総合的に学ぶ科目である。 ( 授業の目標 ) 最上川流域の歴史・自然・産業等を多目的に学習し、自分と地域とのつながりを理解する。 ( 到達目標 ) 講義を聴いて最上川に関する主題を探し、レポートにまとめる。</p>	
<p>( 授業計画 )</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 最上川概論 ( 中島 )</li> <li>3. 最上川の砂防の治山 ( 中島 )</li> <li>4. 山形大海牛 ( 丸山 )</li> <li>5. 出羽の国が海だった頃 ( 丸山 )</li> <li>6. 最上川流域の食文化 ( 大森 )</li> <li>7. 最上川流域の産物 ( 大森 )</li> <li>8. 人の流れと川の流れ ( 中・近世の最上川流域 ) ( 伊藤 )</li> <li>9. 文学・思想に現れた最上川 ( 人々は最上川をどう見たか ) ( 伊藤 )</li> <li>10. 公立中枢病院の役割と救急体制の現状 ( 菅井 )</li> <li>11. 検診業務の現状と地域性 ( 菅井 )</li> <li>12. 山形の現代産業の成立と発展 ( 高橋 )</li> <li>13. 山形の産業と世界の結びつき ( 高橋 )</li> <li>14. 最上川におけるディスプレイデバイスの発展 ( 近藤 )</li> <li>15. 最上川における天童の製品化 ( 近藤 )</li> </ol>	
<p>( 成績評価の方法 ) 出席と小テストを70%、毎回の出席と講義に関する小テスト ( 感想・質問なども ) を各教官10点 × 7人とする。講義に関連した主題をまとめたレポート30%。採点して欲しい教官2名を学生が指名する。</p>	
<p>( テキスト ) オリエンテーションの時に7人の教官から説明する。</p>	
<p>( 参考書 ) オリエンテーションの時に7人の教官から説明する。</p>	
<p>( その他 )</p>	<p>( 履修に当たったの留意点 )</p> <p>( 学生へのメッセージ等 )</p> <p>( 担当教官の専門分野 )</p> <p>( 自由記載欄 )</p>

まぜご班

<p>(授業科目名) 雪・酒・キムチ 山形文化の多面的探求</p>	<p>(開講学年) 1 学年</p>
<p>(授業英語名) Snow, Drink and Kimuchi</p>	<p>(開講学期) 前 期</p>
<p>(担当教官) (ローマ字) 芦立一郎 他</p>	<p>(単位数) 2 単位</p>
<p>(開講形態) 演 習</p>	
<p>(教官の所属) 人, 教, 理, 医, 工, 農 各 1 計 6 名</p>	
<p>(授業概要) 授業目標：山形の文化と風土を多面的に考察する。具体的には、各学部専門性を活かして、総合的に雪・酒・キムチを探究する。 到達目標：1. 雪・酒・キムチの各について、各分野からアプローチを活かして追究に値する問題を見出すことができる。 2. 問題を追究する技能を身につける。 3. 専門性に基づくコミュニケーション能力を身につける。 4. 専門外の人への説明能力を身につける。 5. 山形の文化と風土について多面的に考察したレポートを作成する。</p>	
<p>(授業計画) 各テーマに4回の講義をあてる。 1. オリエンテーション 問題発見作業 2～5. 親 雪 アプローチ 各学部グループ追究 6～9. 地 酒 まぜごはんグループ交流 10～13. キムチ まぜごはんグループ交流 14. 各学部グループごとまとめ体系 レポート作成・交流 15. 全体プレゼンテーション公開</p>	
<p>(成績評価の方法) ・小レポート 3回 10% 10% 10% 到達目標 <u>1, 2</u> ・レポート 1回 30% <u>5</u> ・全体発表 1回(公開に来た人にも) 10% <u>3, 4</u> ・まぜごはん観察 10% 10% 10% 到達目標 <u>3, 4</u></p>	
<p>(テキスト) 各学部教官から、必要に応じて資料を配布する。</p>	
<p>(参考書)</p>	
<p>(その他)</p>	<p>(履修に当たっての留意点) 自主性をもって粘り強く取り組むこと。</p> <hr/> <p>(学生へのメッセージ等) 雪・酒・キムチについて複数のアプローチで探求します。 そのアプローチを総合することを期待します。</p> <hr/> <p>(担当教官の専門分野)</p> <hr/> <p>(自由記載欄)</p>

天津班

(授業科目名) まるごと人間学		(開講学年) 2～6年(I・Ⅱ4,Ⅲ6)			
(授業英語名) The humanomics		(開講学期)			
(担当教官) (ローマ字) 夏賀元康(他) Natsuga Motoyasu, etc.....		(単位数)			
(教官の所属) 農学部(他)		(開講形態) 講義			
(授業概要) 人間とは何か。様々な角度からつついてみよう。山大が誇るリモートシステムを駆使したマルチメディア講義・討論。大テーマ「人間」を3つのサブテーマ「臓器移植」「食」「福祉」に分けて行う講義討論に参加する。各学部の専門家だからこそ提供できる面白くて濃密な時間。学内外に広く公開します。 (授業目標)一つのテーマについて様々な見方を修得する。 (到達目標)分野を超えた議論。情報交換力。自分の意見がどれだけ変化したか。					
(授業計画) <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 33%; vertical-align: top;">                     1. }                      2. }                      3. } 討論 医学部                      4. }                      5. } 臓器移植                 </td> <td style="width: 33%; vertical-align: top;">                     6. }                      7. }                      8. } 討論 農学部                      9. }                      10. } 食                 </td> <td style="width: 33%; vertical-align: top;">                     11. }                      12. }                      13. } 討論 工学部                      14. }                      15. } 福祉                 </td> </tr> </table>			1. } 2. } 3. } 討論 医学部 4. } 5. } 臓器移植	6. } 7. } 8. } 討論 農学部 9. } 10. } 食	11. } 12. } 13. } 討論 工学部 14. } 15. } 福祉
1. } 2. } 3. } 討論 医学部 4. } 5. } 臓器移植	6. } 7. } 8. } 討論 農学部 9. } 10. } 食	11. } 12. } 13. } 討論 工学部 14. } 15. } 福祉			
(成績評価の方法) 討論前に各自レポート提出。討論後に返却し、新しく得た知見を追加してレポートを完成し提出。評価は他キャンパス教官が行う。討論への参加の積極性を評価する。20%を加算する。					
(テキスト)					
(参考書)					
(その他)	(履修に当たっての留意点)				
	(学生へのメッセージ等)				
	(担当教官の専門分野)				
	(自由記載欄)				



## 全体会記録

総合司会 横山 晶一  
記録者 本谷 秀堅

司会：各班の授業のキャッチフレーズはなんですか。

ガルウィング班：Title がキャッチフレーズ。

べにばな班：Title がキャッチフレーズ。少人数制。ラフランスの食べ方など。  
それほどエンタテインしなくてもいいのではないか。

蒙古班：母の川，最上川。

まぜご班：Title がキャッチフレーズ。ピリッと山形。

天津班：人間とは何か。

中村（人）：天津班の科目の対象年次が「2～6年」とされているのはなぜか。

天津班：医学部は6年。設定はリモート講義である。

中村（人）：リモート講義形式と討論形式にはギャップがあるのではないか。

天津班：充実したリモート講義システムなら討論が可能。

司会：蒙古班では前のプログラムまで入っていた「交通」が抜けているがなぜか。

蒙古班：伊藤先生担当の講義に入っている。

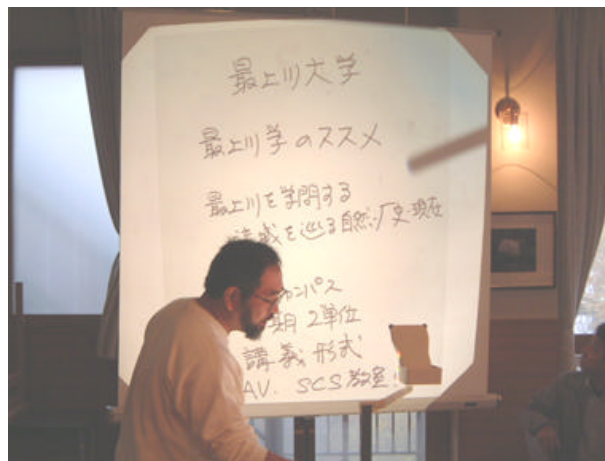
私達の班では，来年からでも実施可能な形で考えています。

【拍手!!】

司会：まぜご班の「酒」について，もう一言。「試飲」はしないのか？

まぜご班：受講生は19歳なので，「試飲」は無理でしょう。なぜ地酒が売れないか，多面的に考えたい。

「キムチ」については，“まぜ方”が鍵である。その解説を交え，唐辛子のルーツについても発信したい。



# プログラム 「授業方法の改善」

## グループ作業記録

### ガルウイング班

司会者 加来 伸夫  
記録者 澤田 裕治  
発表者 加来 伸夫

#### 課題 リレー式授業

- ・外部講師を招いて対話形式（インタビュー）により話をうかがう。  
外部講師は現場の人(例 立谷川清掃工場)に来てもらう。
- ・映像視覚的スライド(実例を挙げて具体的に理解を促す)。原物を示す。
- ・リレー式授業一般  
事前に教師同士で打ち合わせにより、理念を共有しておく。  
そのことにより短所を補うことができる。  
長所としては多面的な考察が可能となる(専門に偏らない)。
- ・1人2回の講義で、1回は小レポートを課すことにより一貫性の追求が可能となる。
- ・市民への公開も今後検討する。( インターネットにUPも)

### べにばな班

司会者 中野 知之  
記録者 田村 陽子  
発表者 須賀 一好

#### 課題 100名以上の講義科目

- ・レジュメをきっちり作っておく(キーワード等のみを板書する。)
- ・板書も使うことは使う。他の視覚材料も使う。
- ・予習用のテキストをきちんと指定。
- ・スクリーンと黒板の両方のあるところ。(環境をそろえる)
- ・TAを有効利用する(採点, チェック等)
- ・授業にバリエーションを持たせる。  
途中にアンケートをとる。  
小テストを最後に入れる。レポートも時々課す。  
学生を当てる。(ランダムに or 指定しておく)  
視覚に訴える。  
具体的事例を出してイメージをわかせる。(皆がわかるよう)
- ・履修要件を出してレベルをそろえる。

## 蒙 古 班

司会者 近藤 和弘  
記録者 中島 勇喜  
発表者 近藤 和弘

### 課 題 100名以上の講義科目

- ・前期：講義形式を基本とする。他の実験実習をすすめ補完させる。  
前期レポートで選んだテーマで見学・フィールドワーク  
見学・フィールドワーク内容で公開  
ホームページ
- ・100人以上なので相互間のコミュニケーションはとりにくい。  
2回目が終わわり，3回目の初めの10分間で前担当者が2回分の説明と次へのつながりを述べる。

長所：「最上川学のススメ」を毎年繰り返し実施する。

短所：「東北学」に勝てるか？ 勝てる。客数の多いところで実施

発展コースは見学する場所にはことかかない。

(例)川くだり，大石田の舟運と花火，立谷沢川の風車，砂丘

担当者の教員が全講義に出席することがこの講義のミソ。

## まぜご班

司会者 高 吉嬉  
記録者 安達 義也  
発表者 高橋 一郎

### 課 題 20名程度の少人数セミナー

- 長所
- ・参加意識の高まり。能動的に取り組む。
  - ・学生間のコミュニケーション（グループ内）
  - ・アイデアが出易く，まとまり易い。
  - ・学習意欲が出る。
  - ・教官が学生を早く理解できる。
- 短所
- ・グループの編成に依存することが大きい。
  - ・個人の較差がはっきりする。(積極性・能力)
  - ・グループ活動への導入が難しい。
- 工夫
- 物的 小部屋 セミナー室  
動機付け  
学生のコミュニケーションが大事（自己紹介など）  
TAの利用 3名/20名  
学生の役割分担 役割のローテーション
- 授業形態の改良：提言
- 1 グループの指導・活動の充実 動機付けに工夫。  
段階をおって慣れさせ，共同作業ができるように。
  - 2 グループ編成方法，役割分担。
  - 3 セミナー室の整備
  - 4 TAの手当

# 天津班

司会者 本谷 秀堅  
記録者 夏賀 元康  
発表者 富田かおる

## 課題 20名程度の少人数セミナー

	長所	短所
講義	・顔が見える ・マイクが不要 ・名前が覚えられる ・入力の微調節が可能	・少人数で気が抜けない。 ・馴れ合いになってしまう。 ・下位に合わせてしまう。 A
グループ 討議	・全員が発言できる	・満足できる知識レベルに 到達できない。 B
実習	・全員が全工程を体験できる（農場実習） ・20名までなら教官1名で対応（技術研修）	・時間の制限がある。 C
自習	Aで上位は別メニューの自習ができるよう準備	
全体		・希望がかなえられない。 D

A．到達レベルをいくつか設定し、個人によって到達レベルを変える。(CAI)  
・講義の最初に現状把握を行う。 CAIそのもの。少人数では導入しない。

試験ではなく個別面談により小グループにわけ。複式授業(コンピューターの利用)

A 上位は別メニューで自習ができるよう準備。

B 事前に知識を与える。

C 準備に時間がかかるが、一度やっておけば後はそれほど負担にならない。

90分 180分に拡大する。ノウハウの伝授。

D 資源を増やさなければならない。

結論：奇を衒った解決法はない。地道な努力があるのみ。準備とケアが必須。

## 全体会記録

総合司会 石川 優  
記録者 五十嵐喜治

田村(人): 蒙古班で考えたものは「小規模授業」のものではないか?

蒙古班: 小規模と大規模をミックスとなっている。

田村(人): 大規模については考えていないのではないか?

蒙古班: 小規模の内容を学生にフィードバックすることを大規模の一つと考えている。

須賀(育): 天津班の複式講義はどのような形か?

天津班: 具体的な方法については検討しなかった。コンピュータ等を使って、到達度の低い学生のケアを行うことをその一つと考えている。

石川(工): まぜご班の「少人数の授業」で、導入のところが難しい理由は?

まぜご班: 初めての集まりであり、お互いになじみにくくグループ形成が困難だと思う。

## 第2回 教養教育FD合宿セミナー」参加者の感想文

人文学部 芦立一郎

最近はやりのFDとかいうものをしてみましょうということで参加いたしました。生来なまけもの故、仔細を忘れる老人力も相当についてきたので、タカをくくりマア何とかなるさと出かけました。“ネクタイをするな、・・・さんと呼べ云云”とかいうから、例の学生を教えつつ、学生とともに学ぶ教師とかいうやつで、たぶんスポーツ教室のインストラクターみたいになるものを練習するんだぐらいに考え、今様でもあり大変結構なことではなからうかなどといささか不謹慎にもそうおもっていました。でも、師の古来よりの基本である、人を導くにふさわしい特性と素養などもとめられたらどうしようとヒソカに恐れていたのではあります。

日頃は君君、臣臣、明德を天下に明らかにする大学などというような古色蒼然とした文章のなかをうろうろとさまよっています。師が師らしくないのを棚にあげて、「学生が学生らしくないのが元凶」とヨタをとばしてはどうしようもない教師ではありますから、忙しく考える暇も与えないプログラムから、多くのことを学ぶのはもとよりむずかしいわけではあります。それでも、様々な異なる知的背景をもって年齢も親子ほどにマチマチな教官連が、小学校の学級会の如くに、まじめに～ゴッコをするのだから（小生は年がいもなく真剣にとりくんでいたつもり）、それだけでも面白くなからう筈はなく、またまたそれぞれ折々に披露される教育のワザ・芸・技法も有用で、全体として新しい望まれる教師の型なんかも、自分との距離とともに見えてきたような氣もいたしました。まだまだ遙か彼方にはあります。



工学部 安達義也

参加の動機は「指名されたのでしかたなく」という全く消極的なものでした。自分が参加することになって、昨年の参加者に様子を聞いたり報告書に目を通したりするうちに、昨年は何も知らされずにセミナーが始まったようで今年は一切どんなことをするのだろうと不安に満

ちたセミナー参加となりました。今年は事前に案内が配布され、昨年と同じようなことをするのだとわかり、少し不安は減っていきました。実際に参加してみると、各班に昨年の経験者がいて、スムーズな進行ができたと思います。昨年の報告書から受ける印象よりも今年のセミナーは比較的ソフトな雰囲気だったのかなと思います。昨年、非常に不評だった懇親会でのゲームが無くなりほっとしました。

プログラムや懇親会を通して、他学部の教官との交流・意見交換ができたことはとても有意義でした。同じような問題で悩んでいて、様々な工夫をしている。自分の講義にさっそく取り入れることができそうなアイデアが見つかった。そんな話をするうちに、こういう人たちと一緒に山形大学を支えていくという具体的な意識が持てるようになった気がします。

プログラムではシラバスを完成させていくという最終形が具体的で取り組みやすかった。それに比べると、プログラムではそのあたりが難しく40分の討議では不十分な感じがしました。とくにプログラム「授業方法の改善」では、6つのプログラムの中でもっとも実践的な課題であり、活発な意見がでると思ったが、どの提案も物足りなかったようでした。100名以上の講義の課題は自分の授業に取り入れられるのではないかという期待は空振りでした。プログラムの課題とその構成など工夫が必要かと感じました。また、さまざまなスタイルの授業（多人数講義型や補習授業など）への学生主体型授業の導入の仕方などについて興味を持ちました。

工学部 石川 優

大学において各自が目指す専門を学ぶ学生において、その専門分野とは異なる多様な教養は、専門技術により社会に貢献とするとき、その専門分野の社会的な意義として影響を理解する上で有意義である。

上記の教養の意義は本学で掲げる意義と基本的には一致していると考えます。本学においても数多くの教養科目が一年次を中心に配置されている。しかしそれはその目的に反してほとんどその効果は得られていない。現状の教養教育の効果の判断はその目的が明確でないことが多く、そのため教育効果の評価は困難な場合が多い。しかし、教養課程を経験してきた多くの学生において、その記憶が極めて希薄であるか、あるいは全くないに等しい状態である。さらに問題は、講義の理解度あるいは到達度の評価は専門に移行してきた学生によれば、その評価は出席により決まり、理解度、到達度に関しては全く評価がない場合が多い。現状の教養教育は、専門の学問の勉学に相応の目的意識を持ち大学に入学してきた学生に対して、その気概を消失させる場合もあり得ると判断で

きる状態にある。端的に述べれば、大学に入学してきた多くの学生は現状教養のカリキュラムを必要と認識していない。その結果学生の教養教育に対する意識は卒業の為の単位となっている。そのため本学の教養教育の一年は、全人的な社会人の育成より、むしろ学生が大学へ入学したときの目標を混乱させる年になっている。

現状の教養教育に対する私の上記のような認識に対して、先日行われたFDセミナーで一連のテーマ設定は的はずれと感じられた。私が所属する工学部では、カリキュラムの検討の際に、今回のFDセミナーで設定された殆どのテーマはすでに十分に検討されていることであり、それを今更セミナーと称して学習する意義が理解出来ない。

学生が勉学を必要と認識できる教育カリキュラムの設定が必要に思う。この目的のために以下のことを提案する。

#### 1) 専門に移行してきた学生に対する教養教育の調査

- ・印象に残る講義名、どのような点が印象的であったか、また、それは各自の専門とどのように関連しているのか
- ・出席状況、評価方法
- ・教養教育は意義があったか  
どのように意義があったか  
意義がない場合にはその理由

#### 2) 学生が必要と認識する教養教育のカリキュラムの編成

- ・各学部の教官が学生の要望と適切な開講時期を考慮して編成

農学部 五十嵐喜治

積極的な参加者を見出せないまま、参加者探しの私が参加することとなった。土・日は、多くの教官がそれぞれ、ご予約があり、特に30～40代の教官は都合のつかない場合が多く、今後、開催の月、曜日についてはご検討をいたなければ幸いである。FDの意義すら、理解が不十分なまま、参加の機会を得たことは、私にとってもまた、主催者側にとっても決して喜ばしいこととは思えない。

各プログラムについて、グループごとで、検討・討論する形式は、参加までの経緯に時間を要した私には、気持ちを切り替える上でも、また、学部の枠を超えて一つの目的に取り組む緊張感と各人の融和をはかる上でも良かったように思われる。

プログラム「山形大学のニーズと課題」、「山形大学をどのような大学にするか」は、あまりにも大きな課題であり、また、議論の成果がいま一つ目に見えにくいプログラムのようにも思われた。各分野の第一線で活躍している卒業生からみたニーズと課題について話をいただいた方が、私にとっては、今後の大学像を考える上で良かったようにも思われる。シラバスの作成までのプログラムは、参加者がそれぞれのアイデアを出し、そのアイデアについてさらに討論する点で、これまでに担当シ

ラバスをほとんど一人で作成してきた私には得るところが多かったようにも思われる。今回のように自由な科目の設定では、途方もない科目名も設定され、果たして、実際にこの科目名が実施された場合、どの程度まで円滑に実施されるかは今一つ自信がないようにも思われる。今回設定した科目の一つぐらいは、FD参加者が中心となり、実施してみるのもよいのではなかろうか。



人文学部 伊藤 豊

当初はイヤイヤながらの参加であったが、いざやってみると久しぶりの合宿気分を満喫でき、結果的にはなかなか楽しかった。学部を越えた人的交流が日頃ほとんどない私にとって、二日間の合宿中に他学部の皆さんと突っ込んだ話をしたのは、確かに貴重な経験であった。特にグループ討論において、各人が単なる教養教育の改善という課題を越えた様々な問題を論じ、広範な意見交換を行い得たのはすばらしかったと思う。

若干の苦言も呈しておく。FD合宿での経験を各人が咀嚼し、自身の授業方法改善に活かしていくのはもちろんである一方で、合宿の場で出た諸意見を包括的な全学改革(「とりあえずやってみました」式カリキュラム改正にとどまらず、という意味)にどう具体的に結びつけていくのかが今のところ明確でない。無論、こんなことは「管理職」の方々がまず考えるべきことであろうが、学内末端教員の抱く山形の将来像が真摯に表明された会合であったが故に、彼らの意見が大学の意思決定にどのような方法で反映されていくのかが明らかにされなかったのは、討論自体の充実度に鑑みて惜しいことだと思う。とりわけ、最高責任者たる学長が合宿途中で退席したのはいかにも痛かった。法人化以後の学長権限は今よりもはるかに強化されると仄聞するが、そうした強い権限をもって改革に邁進するには、まず組織のトップたる学長自身が、学内に遍在する改革志向の意見を吸い上げるための機会を最大限に利用すべきである。来年は合宿場で車で乗りつけた後、自ら車に火をかけて不退転の決意を皆に示していただくのはどうだろうか。

もう一つ、合宿参加費は最初から大学が支払うのが筋である。休日と自分の研究時間を犠牲にし蔵王まで出かけるのを厭わなかった教官たちに、一時的とはいえ出費を強いるのはよろしくない。以上二点、FD合宿の運営責任者の方々は来年に向けてぜひ考えてほしい。



## 教育学部 江間史明

合宿セミナーの内容にそくして、感想を述べたい。セミナーのカリキュラムは、次の三つに分かれていると思われる。

- 1 授業設計（プログラム , , ）
- 2 授業方法の改善（プログラム ）
- 3 山形大学のありかた（プログラム , , ）

第一に、授業方法の改善のパートは、位置付けがわかりにくかった。とくに、授業設計とかかわらせるのかどうかについてである。現状の位置付けでは、授業設計と連動して考えがちである。「方法」のみを、とりだして議論するというところに無理があるように思われる。

第二に、山形大学のありかたを考えるパートについてである。これは、ニーズや課題から企画を考えるということであった。これについては、いくつかの考察の観点を示してはどうであろうか。たとえば、地域性、総合性、国際性、生涯性、などである。地域性では、地域社会との連携、総合性では総合大学としても利点をどうかするか、などが問題となろう。個別の学部、教官の取り組みは豊かであるが、そのみから、ボトムアップで議論する方向だけでは、議論の材料がたりないように思われる。ここであげた観点とは、個別のとりくみと、全体としての山形大学のありかたを考えることとを、媒介するようなものということである。

第三に、授業設計についてである。これについては、学ぶところが多かった。たとえば、雪という素材について、各学部の専門からどのような問題がたちあがるのか、そのアプローチの多様性を知り、新鮮な思いがした。こうした多面的な解明をコンセプトとした授業の設計は、おもしろかった。だが、こうしたアイデアと現実の授業改善をどのようにむすんだらよいのだろうか。第二で述べたような、個別の、ある観点なり、理念なりがあって、それをプロジェクトとして具体化する、というようなスタイルが必要のように思われる。

## 教育学部 大森 桂

今年6月に山形大学の講師に着任した。5月まで自分自身が学生で、突如逆の立場になり、授業の準備に追われる日々を送っている。当初、FD合宿に参加するのを迷っていた。日程はハードであるし、日々体当たりでこなしている自分の講義のやり方をさらけ出すことになる

からである。しかし、さらけ出すなら新任の今年がチャンス。逆に他の人から色々なアイデアを得られるだろうと考え、参加を決めた。

参加して第一に良かった点は、他学部の教官と知り合いになれたことである。小白川以外のキャンパスの現状を初めて具体的に知ることができた。

第二に良かった点は、プレゼンテーションのスキルをトレーニングできたことである。全セッション、発表担当者は、各班で討論した内容をすぐにOHPシートにまとめ、全員の前で発表しなければならない。討論・発表の時間は決められているから、容赦なく発表の順番がまわってくる。時間切れできちんとした結論の出なかった場合でも、いかに内容を分かりやすくまとめ、かつ、聞き手にインパクトを与えるかを即座に考え、実行しなくてはならない。さらに発表は全員から5段階で評価される。自分の発表が客観的な評価を受ける貴重な経験となった。

第三に良かった点は、教養教育の役割を再確認できたことである。正直、参加直後は果たしてこの経験が日々の講義に生かせるか疑問であった。しかし、合宿の翌週、教養教育の講義をしている時に自分の意識の変化に気づいた。「自分の担当する『生活科学』という講義で、私は目の前にいる学生達にどんな教養を身につけて欲しいと考えているのだろう」と頻りに自分自身に問い直すようになった。以前はどちらかという、内容の高度さや最新情報の提供を重視していたと思う。

私の場合、FD合宿は、教育方法の改善よりも意識改革という点でより有意義であったと思う。今後さらに、学生側にも、単に「一年生のうちに履修しておかなければならない単位」という意識ではなく、「自分はこんな教養を身につけたい」という意欲を持って講義にのぞむことを期待したい。

## 農学部 加来伸夫

平成14年10月19日から20日にかけて開催された「山形大学教養教育FD合宿セミナー」に参加した。このセミナーには山形大学を構成する各学部の教官が参加しており、普段顔を会わせることの無い方々とお話しが出来る良い機会となった。

セミナーの目的は、教官個人が大学を支えることへの位置付け、教育の基本的構成要素、大学における各科目の存在意義、授業設計、成績評価法などを改めて整理する、教員相互の交流の3つであった。しかし、日程が短い割にプログラムが多く、及びについては消化不良で終わった感がある。これは、参加者に対する事前の情報提供不足（あるいは参加者の認識不足）の影響が大きい。このセミナーの詳しい内容について知らずに参加された方も多かったようである。折角、このような大々的なセミナーを開催するのであるから、参加者にセミナーの目標や到達目標を周知・徹底させる工夫が必要であろう。また、普段からの啓蒙活動や新任教官に対す

る研修等により、FDに対する認識を高めておくことも、FD合宿セミナーを成功させるためには重要であると思われる。

さて、個別のプログラムでは、授業名と目標の設定、授業内容の作成、及びシラバスの完成といった実務に関する事柄については大変参考になった。授業内容の改善、山形大学のニーズと課題、山形大学をどのような大学にするかといった事柄については、発表や議論の内容について、なるほどとは思ったが、あまりピンとはこなかった。しかし、セミナーを終えて帰宅後、改めて全体討議記録や作業内容記録を読み直したところ、所々に参考になる部分や考えさせられる部分があり、セミナー中には気が付かなかった新たな発見や感動があった。本セミナーでは、予習と復習の大切さを再確認できた。

工学部 勝山哲雄

教養教育FDセミナーがあるということは以前から聞いていた。教官会議で、どなたか出席しなければならないとのことで、会議にはかられたが、出席者は決まらなかった。どのようなセミナーなのか、多くの人はその場では見当もついていないようであった。勿論、現在でも教養教育FDセミナーと言われても、必ずしもその中身は理解されてはいない。それより、外部資金導入努力などの圧力を肌身で感じている教官が多いのが実際である。この雰囲気には飲み込まれ、教育に専念できない状況の一部にあることが危惧される。

このような状況にあって我々教員が、研究と同じくらいに教育に重要性を見出すことは、極めて意義のあることと感じられる。大学教育の中で、専門教育がよく議論され、その改善等努力がなされている。しかし、一方では教養教育がないがしろにされているきらいがある。今年、物理と化学の分野で日本人にノーベル賞が与えられた。これは、「短期的な成果を求めず、じっくり基礎から幅広く研究ができる環境にあったこと。広くて深い知識と充実して意欲に満ちた心を持っていたこと。」によるものが大きいと論調されている（朝日新聞、02,10,22,池内了）。この点は我々は見落としていけない所である。教養教育はこれら、人の根幹をなす心に深く関わっているはずである。専門教育のみに偏り、役に立つことのみを近視眼的に考える心を形成してしまえば将来に大きな禍根を残すことになる。

理系の分野では、海外から求められて、日本技術者教育認定制度が走り出している。「高等教育機関が一定レベル以上の技術者を修了させている」と教育機関を認定してもらう制度である。そこでは、人文科学、社会科学の科目の学習が実時間250時間以上有することが求められている。これは、人間の人格にかかわる教育が十分なされているかとのチェックである。現行の工学部のカリキュラムでは、人文科学、社会科学等の科目は専門科目領域には皆無に近い。教養教育でその時間を確保する必要がある。

このように内外に、教養教育充実の要望が満ちているので、山形大学が一体となって教養教育を充実させることは極めて重要であると思われる。今回、教養教育FDセミナーに参加させていただき教養教育を考える機会となった。全学部の教官が集い教養教育を考えたので山形大学の一員であるとの実感が持てた。セミナー企画、実行の担当者にお礼を申し上げたい。



教育学部 金井 雅之

今回のFD合宿セミナーは、FD全般についても考えるよい機会になった。以下着任後間もない新任教官として現行の山形大学の制度的問題点と考えていることを、いくつか述べてみたい。

- ・ まず一般的な問題点として、大学という組織が何を目標としているのかにかんする全学的コンセンサスに欠けている。一般に大学の組織目標となりうるのは研究もしくは教育であり、どちらか一方に特化することはありえないと思うが、山形大学ではどちらをどの程度の割合で重視するのかということにかんする根本方針を、学部ごとではなく大学レベルでまず明確にすべきである。
- ・ それを前提として、組織の構成員に対する人事評価制度をきちんと構築するべきである。現行の制度では、教官の勤務および人事上の評価基準があまりにも研究のみに偏りすぎている。大学の組織目標を研究のみと明確に絞った上でそのような制度を採用しているのならまだしも、そうした自覚なしになんとなく従来からの慣例を引きずっているに過ぎないことが問題なのである。もし大学の組織目標の一部に教育も含めるのであれば、授業を何コマ担当しても給与は変わらず、昇任人事においても教育上の活動はまったく考慮の対象とならないというような制度は、ふさわしくない。
- ・ 学部の独立性を見直すべきである。組織の境界は本来組織目標に照らして決まるべきもので、企業のように明確な目標を立てにくい大学ではあいまいかつ恣意的になりがちなのは否めないが、山形大学としてひとつのまとまりをつくる以上、その下部に独立した意思決定主体があるのは異常である。組織の目標は山形大学にただひとつあるべきもので、各学部はせいぜいその実行機関として業務の効率的な運営に資する限りにおいて存在意義を見出すべきであろう。意思決定主体としての学部教授会は廃止して、大学全体で選挙によって選ばれた代議制の意思決定機関によって一元的に



意思決定をするべきである。



理学部 栗原正人

独立法人化を背景に、大学を取り巻く環境が大きく変化していく中、教養教育の改善とそのあり方を考えるための、今回の合宿セミナーは、大きな意義があると思います。今回の参加者のなかには、私を含めて、本学に赴任して間もない教員が多数おり、本プログラムの遂行にあたって、特に、山形大学の個性と売りに関する議論は、些か、難しいところがあった。プログラムの手順を変更して、山形大学のニーズと課題、山形大学をどのような大学にするか？の二つの課題から、スタートした点は、評価できる。この課題は、山形大学の将来像を大きな視野に立って議論していくものであると思っていたが、実際には、それほど建設的（具体的な）意見がなかったように思われる。私は、教養教育に関する将来像ではなく、このプログラムでは、専門教育、研究も含めて、山形大学そのもののあり方を議論するものだと思っていたが、実際に、他班から出された意見は、教養教育に焦点を絞ったものが殆どであったようである。私が勘違いしたのか、担当の方の説明が不十分であったか、それとも、冊子にある説明が明確でなかったためか、焦点がぼやけてしまったのが残念でならない。今回のセミナーの意義は、山形大学の生き残りをかけた、個性を生かした大学造りを議論する場であると思ったが、実際には、細かい教育のテクニクが中心であり、個性（売り）が不明確であったように思う。山形大学の個性（売り）を教養教育の充実で発揮しようとしているのか（教養教育を売りにした大学）、暫く、参加された学長の意見からも不明瞭な点があったように思われる。本セミナーの遂行にあたって、担当者（学長）の方向付けが、些か曖昧であったのではと感じる。これは私だけの印象かもしれないが、私の意見は、大学は、研究機関であり、教育機関でもある。山形大学は、どちらで個性を発揮したいのか、まず、これを明確にして議論をすすめるべきである。ただ、私は赴任して間もないため、このような議論は既に決着しているのならお許し下さい。いずれにしても、始めの、課題が明確になっていなかったもので、その後のプログラムの進行は、教育テクニクの勉強会に見て取れたのは残念で仕方ない。多少の細かいところは、抜きにしても、大学像を明確にしたあと、それを実現するための、教養

教育であり、専門教育であり、研究であると思います。

農学部 小山浩正

<FDセミナー以前>

研究所から教員になったばかりの私は、4月に初めて講義を担当して愕然とした。プレゼンテーションにはそれなりの自負があった私だが、その自信は最初の講義で学生達に見事に粉碎された。熱弁し、問いかけても眠る者が続出した。考えてみれば私が経験してきた学会・シンポジウムは、目的意識をもって参集した人間が相手だったわけだ。必ずしもそうでない学生の興味を喚起するにはどうすれば良いか？暗中模索した。グループ性、プレゼンテーションの課題はそれなりに効果を発揮し、事後アンケートにもこれらを経験したことに対する評価は高かった。この形態は今後も取り入れることにして「さて次にどのような手があるか」と思索している時に、今回のFDセミナーが行われた。

<FDセミナー以降>

セミナーで実行したプログラムが、山形大学の教育改善に対して即効性があるかは疑問も残る。しかし、個人として収穫が2つある。1つは、グループ性とプレゼンテーションを私自身が体験したわけだが、これらは主体的に成果を出すには有効なことを確認できたことだ。同じテーマを個人で考え、プレゼンテーションの義務がなければ、それほど具体的な提案は出なかったであろう。もう1つは、多くの教員が個別課題に対する学際的なアプローチが理想と考えていることだ。セミナーで提案されたように、学際的アプローチは複数教官によるのが理想的だが、まずは個々でもできるはずだ。

早速、次の日の2年生の講義から実行した。「地球温暖化と」というテーマのレポート作成である。

には、雪でも酒でもキムチでも良い。地球温暖化とはできるだけ関係のないものをキーワードに温暖化を調べ、論じることを課した。数週間後にプレゼンテーションの予定である。結果はまだ出てないが、反応は明かに違う。主旨説明に大きくうなずく学生に勇気づけられた。これもFDセミナーの効果とも言えるだろう。

教育学部 坂井伸之

1. 本セミナーに参加して良かった点

教養教育の授業のあり方について考え、他の教官と意見を交換することができた。

学生主体型授業を初めて体験し、その意義と問題点を自分なりに認識した。

懇親会等で、様々な教官と交流することができた。

2. 本セミナーに対する意見

短時間で班ごとに意見をまとめ発表・討論する形式は、一つの授業体験としては意味があるだろうし、限られた

時間で多くの意見を比較できるという利点がある。しかし一方で、回を重ねるに連れ、対立する意見があっても議論は程々にし、要領よくまとめる技術だけが身に付くようにも思えた。一つの「ゲーム」と割り切れれば良いのかもしれないが、実際の授業改善にどれだけ有効かは疑問である。

様々な分野の教員が共同作業することは確かに意味があるが、プログラム ~ の授業案はどうしても総合領域に限定され、しかも現実的でないものになりがちである。プログラム は、どの授業でも当てはまる一般論で終わってしまい、本当に役立つ情報が得られにくい。同じ領域の教員が実際の授業について検討する機会もほしい。プログラムの一部の班編成を領域ごとにしたらどうか。

いきなりプログラム 「山形大学のニーズと課題」という大きな問題から始めたのは無理がある。学長の都合でスケジュールを急遽変更するのは本末転倒。本セミナーの趣旨は授業方法の改善であり、大学改革の勉強会ではないはず。

同じメンバーで議論を続けるとマンネリになりがちである。より多くの人と交流するためにも、途中で班編成を変えた方が良いと思う。例えば、プログラム ~ と ~ で変えてはどうか。

11:50集合で昼食の時間もないのはきつい。週末は朝食が遅くなりがちであり、集合前に昼食を済ませると言うのは現実的でない。私以外にも、昼食を取り損ねた人が何人かいた。

医学部 齋藤明子

看護教育は技術教育の一環として、現場での実習があり、私の仕事は主に実習指導が多くを占める。授業中心の教育活動でないため、授業改善について考える機会がこれまでなかった。今回のセミナーに参加して、大学の教養教育の位置付けやよりよい授業展開の具体的な方法を知る機会となった。

教養教育の目的は、看護教育にとって技術・資格を取得するための専門知識のベースとなることが必須であるが、それだけでは職業訓練的であり、また、幅広い学問への興味は必要であると思うが、それだけでは専門科目の基盤形成が不完全となるという面を合わせ持つ。大学での学習を将来現場で即実践に活用することが求められる学問分野だけに、そのバランスをとることが必要であることが、他の文系、理系の学問との違いで、看護学の特徴を明確に実感した。架空の授業を想像していき、授業を設計する方法を知るだけでなく、対象となる学生や社会からのニーズは何なのかという点を考えさせられた。

また今回、他の学部にも視野が広がったことは大きな収穫の1つである。専門分野が違うだけでなく、教員経験や職位、年齢、学習背景などたくさん違う人たちが揃った集団の中において、相互研鑽というこのセミナーの目

的は、私としては十分に堪能できた。グループワーク以外での交流においても、何人かの先生方とお話しをして、違った世界を垣間見ることができた。

そして、これらの理解だけでなく、グループワークに積極的に参加しなければならぬ状況に置かれ、看護教育の背景を含めてメンバーに説明した上で、自分の意見を述べることで、司会はそれぞれの意見を収束させたり、明確なキーワードを抽出したりすること、その場その場ですぐ記録にまとめるという作業は、いい訓練になった。そして、プレゼンテーションでは明快に説明すると同時に、他の方々の多くはユーモアを交えており、機転を利かせた話し方も技術だなと実感した。学びの多い合宿セミナーとなった。熱心に且つ大いに盛り上げてくださった委員の先生方に感謝申し上げたい。



人文学部 澤田裕治

今回のセミナーの目的は、「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」(配付文書の表題, p.5)行なわれた。しかし、その目的は達せられたか。残念ながら、それに肯定的に答えることは困難である。参加者は、充足感・達成感を抱くことなく、肉体的にも精神的にも疲労困憊し、消耗しきったように思われる。来年、このうちの何人が自発的に参加を希望するであろうか。また、第1回目の参加者もそれを望む者がどれほどいるであろうか。もし仮にそれが極めて少数だとすれば、この「事業」のあり方に根本的な欠陥がありはしないか。

「途中からの参加及び離脱は禁止」(p.2)され、丸2日間、拘束し、「参加者によるセミナー全体の運営」(p.5)を標榜しながら、そこでの「運営」は単に技術的な作業を強いるものに終始している。一連の作業を息つく暇もなく、単にいわば機械的にこなすことが中心なのである。「こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています」とある(p.1)が、果たしてそうか。たとえ、その山形大版の場合はどうか。目的と手段の適合関係はどうか。講師から、その点のレクチャーや説明はなかった。セミナー講師の役割は、各プログラムの作業内容の説明、各班の巡視に矮小化されているように思える。「オリエンテーション」において「FDの必要性」が取り上げられるとされながら(p.4)、それについてのレクチャーはなかったように思われる。十分に納得のいく説明のないまま、FDの必要性が自明視されて、参加者に他律的に作業を遂行させる。そこには主体性を尊重し、相互に意見交換する場はない。

「各プログラムは、グループ作業を中心に組まれており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験する」とある(p.1)が、何故「学生が運営する学生主体型授業を体験する」必要があるのか不可解であり、また意味不明の文である。「参加者は、参加者自らが運営する参加者主体型セミナーを体験する」の意かと思われるが、もしそうだとすれば、主体性を欠如した他律的な今回のセミナーは「参加者主体型」の内実を全く備えておらず、ますます意味不明となる。

具体的な改善案として、(1)プログラムは2つか3つ(2)2日目は別形態とし、昼までに終わること、以上2点を提案したい。



工学部 高橋一郎

FDセミナーの目的に関して言えば、その達成感がない。なぜなら、現在最も重要となっている授業設計と成績評価に関して、「主体的に検討し、再構築する」といった曖昧な目的設定であったからである。何にも増して重要な「評価」の目的が設定されていなかった。およそ今ほど大学授業の「評価」の必要性が叫ばれている時代はない。学生のためにどのような評価方法が適切か、そして学生へどのように「評価」結果を伝達し教育に生かしていくかを、大学や学部教育理念と学習目標に照らして話し合うことが緊要であるはず。それが「山形大学をどのような大学にするか」というような漠とした論題の陰になって、お題目論争で終わってしまった。教育現場とリンクした議論にならず、絵空事のアイデアを披露しただけという空虚感を味わった。主催者側のオリエンテーションで話されたことだが、90分の短時間に重い課題に取り組むことで、学生たちに90分で充実した内容の講義を準備することの難しさを思い知って欲しいという。なるほど、短い時間でまとめる難しさは味わえたが、議論が尽くせなかったことで消化不良になった。皮肉にも、同じく学生が消化不良の後味の悪さをこんな風を感じているのだからと思ひ知った。もう一つの目的である「学部間の人的交流を深める」点に関しては、さすがに山形大学のシンボルでもある蔵王山寮という会場設定もあって、学部という枠内での日頃の思考から山形大学という総合大学としてのスタンスが求められた。人的交流は、しかし、偶々同じコンビニで顔を合わせていただけの客同士といったレベルから、魅力的な教員団であることに気づかされ、お酒も入って次第に心が開いていったことから十分達成されたと思う。秋深まった山あいが

霧に包まれて濡れてゆく情景を、早朝山寮を抜け出して散策しながら心行くまで楽しんだ。積もれる落ち葉を散らしながら山道を歩き、体全体に冷氣というより靈気が漲る思いで武者震いもした。またこれから下界の雑踏の中へ戻ると思うと、帰りはさすがに別れが淋しいなどと感傷に浸った。お疲れ様。

理学部 高橋良雄

セミナーに参加して感じた肯定的な内容、体験はセミナー最終時に提出した意向調査書に書いたもので、今回は自分で腑に落ちないと感じた内容を中心に書こう。確かな力をもつ卒業生を育てるうえで、このセミナーを続ける意義があるとしたら、私の率直な批評もセミナーを深化させ、豊かにするために何らかの形で寄与できると思う。

セミナーに期待したことは教養教育の学生アンケートの結果を参照し、自分の授業改善に資することであった。学生による授業評価調査を行い、結果が返され、関係委員会で取りまとめ分析は出されているものの、現状は成果を共有しようとしていないと感じている。私を含め、身の授業担当者も授業評価の結果をどう授業改善につなげるかの方策に悩みを持っている。教師側からすれば、学力の問題もあるという意見は多い(私はこの意見には留保する点がある)。多くの教員が集まる席で、学生による授業評価調査結果の分析と、それをどう授業に活かすかという作業を意識的に結びつけるプログラムが欠けていたと思う。

所属した班では、これらのプログラムで設定された課題の検討の際の司会、記録、結果の発表を持ち回りで分担した。限られた時間で、議論・検討内容の記録整理と発表準備を行うことは、未経験のペースであった。結果は自己の内部ペースと全く合わず、このような制約をおいた企画者の意図はともかく、私には多くの点で悲惨なものだった。発表会で他の班の発言を聞いても、意見内容と筋がよく理解できなかったし、議論が表面的という印象を受けた。発表者側の議論が未消化だったのも一因ではないかと考えたい。

これに関連し、短時間で集中討論する型のセミナーを蔵王山寮でやることにも疑問が残る。ゆったりと時間が流れる雰囲気のある場所では、企画側の狙う作業をするには精神的に違和感があり、実際に使ってみて作業性も悪く向いていないと感じた。

企画側から課せられた検討方式は、緊急事態への対応策(止むを得ない選択)の検討か、目標と達成可能な道筋がはっきりわかる課題への取り組みの検討には有効と思う。しかし今回のように、問題意識の異なる構成員が重み付き抽出で人工的に集められた班では、暫定的な合意形成に持ち時間をほとんど費やしてしまう(不可避であろう)。実際にやってみて、課題の検討結果の整理、再検討の時間はなかった。1プログラム90分という時間制限を企画したことの妥当性が、私には理解できない。時

間制約による切迫感という制御条件を参加者に課すことが、参加者のもつ思考法の弱点の克服に有効と考えたのだろうか。

科目設計を共同作業の過程を体験することは参加者間の相互学習として参考になるし、シラバスにまとまった際の参加者の達成感是否定しない。しかし今回は達成感だけで終り、深みがないと思う。そう感じた一つの理由は（他者の評価は投票行動で示されたものの）ついに自己評価の視点と合わせて検討する機会（時間）はなかった。これに加え、受講学生による評価と授業担当者による自己の認識との差異を点検し、顕在化させ、授業改善に資する作業が抜けていたと思う。これらを抜けば、FD活動で得られる大切な果実を利用しないこととなるのではないか。今回の場合、プログラムを削除すれば、これらの課題に180分の時間を割ける。その方が私には役立ったと思う。

人文学部 田村陽子

結論からいうと、FD合宿に参加して得たものは、他の教官との交流ができたという一点に集約される。裏を返せば、（スタッフの方には申し訳ないし、自分でも残念ではあるが、）個々のテーマにおける討論の中で得たものはほとんどなかったということになる。

今後もFD合宿をやるのが前提だとすれば、現実問題としてやる意味があるのは、より具体的・現実的な問題についての討論ではなからうか。例えば、現在のシラバスの書き方をみんなで見て検討する、いくつかの教養のモデル模擬授業（素材をスタッフが用意）を順番にやらせてみて、実際の授業のやり方をチェックする、学長レベルで決めようとしている具体的な大学の構造改革の問題を討論する、などである。

もちろん、出席した教官が個々の教育面に役立てられるような成果が少しでもあればよしとする趣旨にすぎないのであれば、それでいいのかもしれない。また、よその大学でもこの程度だとの意見もあろう。また、互いに他学部の教官同士が率直に意見をぶつけることに対しては、全学の教官間の雰囲気悪くするのではないかという懸念もあろう。しかし、それは、お互いに、人と議論とを切り離せない日本的な条理のみで考えるから生じることであるにすぎない。客観的な議論の仕方、討論の仕方も研修の中に含めて（本来必要もない常識ではあるが）、最初にその点を確認すれば、感情的ではなく、より理性に基づいた上での本音のぶつかり合いができたのではないか。

FD合宿が合理的な討論の場とならず、消極的な参加姿勢と感情的な議論に終始しがちであったことを踏まえて、来年度は討論や議論の方法論をまず確認する必要がある。そうでないと、せっかくお互いに「さん」付けで本音を語ろうとした目的が達せないままに終わるといった遺憾な結果に終わるおそれがある。

長くなりましたが、企画・遂行スタッフの皆様、参加

者の皆様、お疲れさまでした。



人文学部 富田かおる

6段階のプログラムを時間的制約のもと、鐘の合図に合わせて2日間に渡り学習・体験する教養教育FD合宿セミナーに初めて参加し、ひと秋の経験をいたしました。時間的制約のもとで学生主体型授業に関するタスクをこなしていくという方法は、本セミナーの目的達成のために必要な事なのかもしれませんが、自由時間がもっと欲しい...6つのプログラムは少し多すぎる...と思いました。秋の紅葉に囲まれた蔵王山寮の1階、2階の各ポジションに分かれ、グループ作業が進行いたしました。第1プログラム終了の鐘が聞こえ、1階に降りて行きますと、まだ鐘は鳴っていませんとのことでした。聞いた様な気がしましたカランカランという鐘の音、小学校のプールで聞いたなつかしい音ですが、今でも頭の中で少々こだましています。教養教育FD合宿セミナーでは、セミナーの目的としてあげられた、1. 教官個人が大学を支えることの位置付け、2. 教育の基本的構成要素、大学における各科目の存在意義、授業設計、成績評価法などをあらためて整理する、3. 教員相互の交流、のうち、特に、教育の基本的構成要素、授業設計について、グループ作業を通して改めて考え、学ぶことができました。担当科目によって授業設計は異なるとは思いますが、異なった分野からの自由な発言のもと、基本的要素や共通の問題点を取り上げ、具体的に1つの授業を設計していく中で、自分自身の狭い視野を反省し、授業に学生を惹きつけ、ひき込み、自由に討論する方法を考えることに喜びを感じ、教育の基本的構成要素について改めて考え、気づくことができました。グループ作業、全体討論の司会者、記録者、発表者の役割が持ちまわりだったことで、役割を、十分とは言えませんが、一つ一つこなしながら、食事時間も含め、目の前で展開されている事柄に対し、自分なりに専念しながら、セミナー運営に参加することができました。

農学部 中島勇喜

10月19日（土）、20日（日）に開催された教育方法等改善委員会主催の上記セミナーに参加した。蔵王山寮に向かうバスの中での自己紹介中にも話題になったように、多くの参加者が、「自主的」というより「仕方なく」の参加であり、ご多分に漏れず私もその通りであった。今ま

で、授業といえば、誰に教えられるわけでもなく手探り状態で取組んできた身にとっては、「何も今更」という思いと、やはり「何かを掴みたい」という思いの狭間の中でどうしても中途半端な参加であった。「参加する以上は何かを掴みたい」という思いは持っていなくても、かねてから時間にも、場所的にも拘束されたことの少ない身にとって、しかも60歳に近い身にとって、他学部の年齢の異なる方々と「合宿」し、しかも時間的に束縛されると聞けば、積極的な思いより「アア、疲れるな」という思いが先にたち、どうしても二の足を踏む状態での参加であった。しかし、セミナーが終わった今だから言えることであろうが、内容的には、私のような「仕方なく」参加した者にこそ、まさにうってつけのセミナーであった。また、最近では、共に相談しあった同じ班である「蒙古班」のメンバーをはじめ、セミナーの時間を共用した参加者の方々に「やっと帰れたネ」という、開放感に浸る思いを共有する連帯感のような仲間意識も感じているほどである。

このセミナーで私は「最上川学」にこだわり「蒙古班」に迷惑を掛けてしまった。しかし、それはかねてから、自分なりに教養教育でこのような授業を、学部を超えてやってみたいという考えを持っていたからで、少しは、教養教育に目を向けている私の思いの表れだとして、ご容赦願いたい。

グループ作業の面白みも、この年になって学んだので、明日（10月29日）の専門の授業にも、このセミナー方式を早速、実験的に取り入れてみようと思っている。



医学部 中野知之

最初にこの「教養教育FD合宿セミナー」というタイトルを聞いて、内容が全く想像できなかった。しかも2日間缶詰にして行くほどのものとはいったいどんなものなのだろうかと、不安が100%であった。実際に会場に着くやいなや作業内容についての説明があり、それを聞いてさらに気が重くなったが、逃げ場も無くこれも仕事だと覚悟を決めた。他学部の先生方とのグループワークが基本的単位となるのだが、この時に感じたのは学問のバックボーンによる考え方の違いである。特に文科系学部の先生方の考え方がこれほどまでにサイエンスの人と異なるとは思わなかった。加えて、学部によって教育の状況が全く異なっているということもよくわかった。教養教育という学部を超えた組織でも基本的には学部から教官を出しているわけであり、このことが教養教育に大きな影響を及ぼしているのは自明である。グループワーク

の内容に関しては、抽象的なテーマが多く、それに関して議論するのは難しいと感じた。全体として感じたのは、学部を代表して多くの先生方が出席しているのにもかかわらず一部の先生の偏った発言、考え方がセミナーの主流に成っているということ。もちろん誰かが音頭をとってまとめていかなければ成らないのだが、独善的になってはこのようなセミナーの意味が薄れてしまう。まだ二回目ということで多くの問題点が印象に残ってしまったが、良い点としては、学部をこえた山形大学の教官たちが力を合わせて一つの仕事をすることだと思う。普段、他学部の、特に農学部や工学部など離れたキャンパスの先生方との接点がないだけに有意義な時間を過ごせた。

必要なところを改善していけば、このようなセミナーを開催する意義は大きいと思う。教養教育のみでなく、学部教育にも生かすことができると思うので、主催者側にはもっと勉強していただき、参加者により有意義な時間を与えていただきたいと切に願う。

#### 農学部 夏賀元康

昨年2月に農学部へ赴任するまでずっと、民間会社でサラリーマンをしていましたので、FDが何なのか正直言って知りませんでした。意味が分からないまま今回のセミナーに参加させていただいたのですが、インターネットの検索から「大学における教員研修」であることを知り、改めて渡された資料を読み返してみて、なるほどと納得しました。

セミナーは、この字義通り教養教育を改善するにはどのようにしたらいいのかグループ討議によりシラバスを完成させる前半と、学部間の人的交流の促進を狙いとした後半の2部構成でした。スケジュールの変更があり、後半を先にやって前半を後にしたのですが、これがかえって良かったような気がします。はじめはごちなかったグループ討議も、プログラムが進むにしたがってスムーズになり、半分終わって懇親会になったころにはすっかりうちとけていたように思えました。来年以降のプログラム編成は今回のように変更したほうがいいのかもできません。また、せっかく作成したシラバスを実現させる手段が現時点ではないとおっしゃられていましたが、優秀なシラバスは翌年の教養教育に採用するとしてほうが作成により真剣みが加わり熱が入ると思いますので、是非実現していただきたい。個人的には自分の専門教育に関していくつかの改善のヒントが得られました。

最後に、1日目のプログラムは夕食前に終了し、夕食から懇親会にそのまま入った方がいいように感じました。有益なセミナーでしたので、できるだけ多くの教員の参加で今後さらに盛り上げていただきたいと思います。

#### 医学部 古瀬みどり

今年4月山形大学に赴任したばかりです。半年が過ぎ

ましたが、どこにも外出することなく、土日も大学へ来ていることが多いという生活でしたので、蔵王に行けると楽しみにしていたのに、生憎の天候でちょっと残念でした。また、更に残念だったのが、ほぼ24時間宿舎に拘束されている状態でありまわりを見渡すと常に同じ顔がならんでいたということ、あれは誰にとっても精神衛生上よくないということを言いたいです。

参加して良かった点は、他学部の先生方との交流がもてたこと、また教官生活の長い先生からは、話し合いの中で、授業を展開する上での工夫など聞いたことです。近年の全体的な学生の傾向、特に山形大学の学生の傾向については、非常に純朴な学生が多いという点で意見が一致しました。その純朴な学生達が、将来社会で活躍してくれることが、大学に対する社会的評価を決定するのだと、今までは思っていました。しかし、今回の合宿に参加して、少しずつ考えが変わりつつあります。まず第一に教育の質が問われているということ、そして更に私達が山形大学の教官であることに誇りをもって教育にあたらなければならないということに気づいたような気がします。この点を肝に銘じて今後の教育活動にあたりたいと思います。

また今回の合宿では、授業の中でよく行なわれているグループワークについて考えさせられました。2日間で6つのセッションを行うことによって、グループワークの持ち方と有効性について考えました。しつこくながらも職務のためという思いで参加しましたが、あれが学生の立場だったらどうであろう、他者と真剣に話し合うことのない若い世代がグループワークを持ちかけられてできるだろうかなどいろいろです。なぜそれが必要なのか、はっきりとした動機付けがないと意欲を損ない時間をつぶしているだけだということが実感できました。

次年度からの参加は頼まれてもお断りしたいという気持ちで一杯ですが、参加できて勉強になった面が多かったです。このようなトレーニングも教官側にも時には必要だと思います。できるだけ多くの先生方が交代で参加できるのではないかと思います。

思ったまま書き綴りましたが、最後に、合宿の際お世話役をしてくださいました事務方の方々に心から御礼申し上げます。

工学部 本谷秀壘

第2回の教養教育FD合宿セミナーに参加した。開催日は10月の19・20日であった。

曇天の下の土日の開催。平日開催を来年度以降検討していただければと思う。

参加する前は「さぞかし浮ついた議論が行き交う空しい場となるに違いない」と構えていたが、実際は思ったほどではなかった。様々な学部の幅広い年齢層の先生方と話しをできたことから、想像以上の収穫を得た。大学をとりまく様々な問題が、学部が異なるだけでいかに違った影響を与えているのかを、酒を酌み交わしながら

らの会話から窺い知ることができた。

二日間にわたるセミナーの内容は、はじめは講義のキャッチコピーを考えてみたり、シラバスの文体に関する注意の喚起がなされたりすることからはじまったが、終盤には講義内容や講義に必要なリソースへの関心が高まった。キャッチコピーや文体は山大という商品を「いかに売るか」の話であるが、講義の質や必要な教官の人数・講義準備に割くべき時間などは「何を売るか」の話であり、後者の方が本質であろうと考える。議論の重点が後者へと移っていったのは、セミナーの進行方法が当初予定から変更されたりしなくても同じであったと思う。

大学の實力とは教官が有するスキルの総和であり、教育に関わる教官のスキルとは、学生への感情移入の能力や学生の多様性に応ずる能力、学生に伝えるに値する知識の量やその提示の仕方などのことであろう。これらスキルの鍛錬の継続は実も蓋も無く地味なものであるが、その継続の必要性を分野も年齢も異なる先生方との会話を通じて再確認できたことは、とても嬉しい収穫であった。



理学部 丸山俊明

はじめての方は、はじめての方なりに。2回目の方は、2回目の方なりに収穫があったことは確かである。特に今年度、山形に着任されたばかりのハツラツとした方々と一緒にできたことで、2回目の私は新鮮な感覚を取り戻すことができた。同時に、他学部の中堅・ベテランのノーハウも非常に参考になった。

ただ、セミナーの名が体を示しにくいという面もいめない。FD活動に関する企画はすべてFDセミナーとかFD講演会というネーミングなので、一般受けが悪くて企画自体が損をしている。今回の合宿のテーマがシラバスの作成と山形大学の将来像という2本立てであるとするならば、一般の教員が外から見て分かりやすい名称を付けた方が理解されやすいのではないだろうか。

「他学部の先生といっしょにシラバスを作ってみよう」とか「学長と山形の将来を語ろう」とかが表に出てこないこと、商法の販売会と勘違いされても仕方あるまい。せっかく授業のキャッチフレーズや到達目標を勉強するのだから、セミナー自体のコピーや到達目標を副題にでも掲げないと外からわかりにくいという声が残るだろう。

もう一言。なーんだ結局、シラバスといっても図上演習だけか。同じ仮想ゲームなら教養教育の領域の見直しや授業地図の作成というようなバージョンがあってもよいのに。一人一人の研鑽向上が基本であることは充分承

知しているが、学部や学科という中間実行組織の想定なしに、いきなり全学的な山形の将来像と言われたって、飛躍が大きすぎる気もした。自由を保障された個々の授業の確立があったればこそだが、山形として責任を持って授業を展開し学生に提供するというトレーニングも受けてみたい。教員は週に1つか2つの教養の授業のことをFDとして考えればよいが、学生はそれを毎週10~15コマ取らされている現実を忘れてはいけないだろう。

ともかく講師・プロデューサー・事務方のご尽力には頭が下がります。刺激になったことは確かです。ありがとうございました。

工学部 横山晶一

どちらかという、主催者側に立つ者としてこのセミナーに参加したのであるが、初参加でもあるので、一参加者として意見を述べたい。

まず内容、運営であるが、こんなものかなという感想である。FDにはいろいろなやり方があるだろうから、このようなやり方であってもよいと思う。ただ、授業改善のところは、多人数と少人数とに分かれたために、お互いを比較するのが困難になった。できれば同じテーマでやるとよいのではないかと思う。

また、多少現実的ではない設備を想定したものがあってもよいだろうが、逆に、現在の(貧弱な)設備をフルに活用してどのような授業が成り立つのかということも興味がある。このような想定のもとで競わせる(たとえば、黒板の前にスクリーンが下りてきて、OHPと黒板を併用できないときにどのような授業が成り立つのかということ、特に日頃悩まされていることから興味がわくし、すべて黒板という古典的な講義で、どこまで学生の興味を引きつけられるかも面白そうである)のも一案である。

場所は、ああいう閉鎖的なところへ閉じ込めるとするのがこの種の合宿では常套手段であるが、その方が濃密な議論ができてよい。ただ、自己紹介をバスの中でやってしまうと、どうしてもグループごとのつながりしか持てなくなる。自己紹介は、バスの中でやるにしても、もう一度山寮に到着後にやるべきである。

時期は、工学部ではちょうど研究室公開を行う学園祭の真っ只中で、しかも科研費等の書類書きがたまっているという最悪の時期である。やはり夏休み中の9月等にすべきである。また、人数はあれでしかたがないだろうが、工学部では、全員参加に10~20年かかる。時期、人数とも改めて検討してほしい。

最後に、裏方でご努力された事務方に感謝したい。適切な運営だったと思う。

